家庭雜誌

第四拾壹號

清潔　清潔は健康の始なり。正心の始なり。

火星の奇象　何等の奇象ぞ。

自然の於母影　人間到る處に天趣あり。

秋の山づと　雙眉高尾山の秋を銜ふて歸る。

家庭の敎育　躰育の要を示して適切。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

國民新聞

最忠實なる國民新聞！

最勤勉なる國民新聞！

國民新聞は、大新聞中の大新聞なり、新聞紙中の新聞紙なり。

國民新聞は、最も其職分に忠實なり、而して其職分を盡くすに於て最も勤勉なり。

國民新聞特派員の多きと其配置の周到なるとは其忠實と勤勉とを證明すべし。

在廣島　富德猪一郎
　　　　平田久
　　　　小林萬吉

戰地の消息の大本營に達するものは總て至急電報を以て之を本社に致すべし、其報導の驚くべき迅速を以て他に先するは讀者の夙に識認せらるゝ所なり。

戰地の通信に至りては

第一軍　松原岩五郎
第二軍　久保田金僊
　　　　阿部充家
軍艦千代田　國木田哲夫

其他第二軍の戰況視察の爲めに從軍したる代議士　長谷場致堂　氏は特に其觀察したる所を本社に頒つの約あり又た第二軍に從ふて其樞機に參與するを得べき　枕戈生　ありて最も奇警なる通信を爲すべく戰地の實況を知るの手段に於て殆んど遺漏なきを期す。

又井上公使渡韓と與に第二の大革新亦來らんとする　京城に於ては　菊地謙讓　天涯生　の兩氏あり又た　釜山　鑑湖生　仁川　愛民生　の兩氏あり。

國民新聞は號外を出すに於て最も勤勉なり、而して又た最も敏速なり。

國民新聞は夜滊車發送實行以來未だ曾て一日たりとも本社に於ては後れたることなし數十里外の讀者も府內の讀者と殆んど同時に同日の新聞を讀み得べし。

●一ヶ月三十五錢三ヶ月壹圓一ヶ年三圓九十錢●地方一ヶ月に付郵稅拾三錢●廣告料（一行二十二字詰）一回拾三錢二回以上拾二錢

發行所　國民新聞社

東京市京橋區日吉町四番地

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

塚越芳太郎著

新刊 十二文豪第十卷

近松門左衛門

定價十八錢 郵税四錢

目錄

征清の大軍海を渡て大陸に入り、大勢潮の如く、國民の意氣方に昂れり。大なる日本は將に世界の極東に打建てられんとす。此の千歲の一時に際して、「近松門左衛門」出づ。其意外なるを驚くこと勿れ、其時を知らざるを笑ふこと勿れ。槊を横へて猶詩を賦し、軍中猶書を誦ずるにあらずや。堂々たる大國民の胸中焉ぞ其間に千古の詩人を永評するの閑日月なからん。

日本の元祿あるは猶は英國のエリサベス時代あるが如きなり。元祿の近松門左衛門あるはエリサベス時代のシエーキスピアあるが如きなり。其高下の同じきや否やは我知らず、其小大の等しきや否やは我知らず。然れども英國民にしてシエーキスピアを有するを誇るの權理あらば、我亦近松を有するを誇る能はざらんや。

日本開國而降三千年、能く人生を諷詠したること復た彼が如くなりしものある乎。將に來らんとする日本は如何に誇るべき詩人を有するやを知らず、去れども已に去りたる日本は思想史上の大立物として此の千古の詩人を推さゞるを得ざるなり。嗚呼彼、近世榮華の絕頂に立ちて、歡樂窮りて哀情多き人生を永嘆す、其永嘆や直に日本思想の花たり。此書は則ち此の誇るべき詩人の生を敍したるもの、殊に意を用ゐて思想界の生涯を敍したり。然れども其敍し得て眞相に近きや近からざるやは讀者自ら之を判して可也。

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

五版

竹越與三郎著

支那論

定價拾錢

郵税二錢

天下の同情は遂に五版を重ねしむ

各新聞は如何に評せし乎

女學雜誌は曰く『流麗雅潔の筆を揮つて一瀉千里の文を行る、間ま堂々大政事家の識見を示す、戰後の要償日佛露三國同盟の策、志士の猛省を促す』新朝野は曰く『著者が如何なる抱負を以て、此の冊子を著はしたるかを想見すべし、篇中の諸論皆奕々として紙上に躍り、一讀快哉を呼ばしむ、就中我輩の最も奇警とする所は、同盟論は何を疏し得たる乎。二十世紀の新權力平均にあり、其文品に至ては筆々靈快、字々金石の韻あり』毎日新聞は曰く『得意の奔放優麗なる筆を以て大國の大抱負を描出し人をして快と呼ばしむ、日露佛の三國同盟を説く處壓卷の文字也』報知は曰く『我國の清國に於る一は文明一は蠻野、進取と退歩、到底共に東洋に並立す可からざる所以を説き皆過去の事實と將來の推理に據りて言を立つ尙ほ其「我軍一たび海に浮ぶの日は世界の舞臺に上るの覺悟なかる可からざる也」との數語に至ては恐らくは此著に於ける神髓ならん』大坂朝日は曰く『日清同盟論の迂謬を嗤ひ兵火に非んば清國の惰眠を醒す能はざるを説き最後に日露佛の同盟を以て我が清國に對する大希望を貫ぬかんとしたるが如き策士胸中の蘊蓄する所夷の思ふ所に匪すと謂ふべし』

四版より歐洲勢力東漸地圖及び清韓實用地圖を添ゆ

發行所　民友社

東京市京橋區日吉町四番地

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

民友社出版書概目錄

書名	定價	郵税
國民叢書 人物管見	拾五錢	二錢
國民叢書 青年教育	拾五錢	四錢
國民叢書 靜思餘錄	拾五錢	四錢
國民叢書 文學斷片	拾五錢	四錢
國民叢書 天然と人	貳拾錢	四錢
吉田松陰	五拾錢	八錢
グラッドストン	貳拾錢	四錢
武雷土	拾五錢	四錢
格武電	貳拾錢	四錢
格朗宅	貳拾錢	四錢
伊太利建國三傑	貳拾錢	四錢
幕府衰亡論	卅五錢	六錢
新日本史 上	四拾錢	六錢
新日本史 中	三拾錢	六錢

書名	定價	郵税
第二之維新	拾錢	貳錢
國民的大問題	貳拾錢	四錢
英米佛比較憲法論	貳拾錢	四錢
排偽哲學論	拾貳錢	貳錢
新日本之青年	貳拾錢	四錢
誕生日	拾五錢	貳錢
一千語金	五錢	貳錢
第一國民小說	拾五錢	四錢
第二國民小說	拾五錢	六錢
第三國民小說	拾五錢	四錢
第四國民小說	拾五錢	四錢
歸省	拾五錢	四錢
懷舊	貳拾錢	四錢
最暗黑之東京	拾參錢	四錢

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治二十七年十一月十日發行
家庭雜誌第四拾壹號

目錄

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA



Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

社説

清潔

語に『新に沐ふものは必ず冠を彈き、新に浴するものは必ず衣を振ふ。』と申す事あり。清潔を喜ぶは人の性なるが故にあらずや。

然るに世には兎角異を好み人にすねて弊衣垢面とさらにむさくろしくして、之を豪傑たり英雄たるに缺くべからざる資格の樣に思ふものあり。成程衣服態度の外觀にのみ心を勞して、實力の修養をおろそかにするは、最も笑ふべく卑しむべき小人の事なりと雖、英雄たり豪傑たるの資格が弊衣垢面にありと思ふは誤りなり。英雄の英雄たり豪傑の豪傑たる所以は唯實力技倆の如何にのみ存して、毫も垢面弊衣と相渉るものにあらず。如何に清潔にすれば迚英雄たり豪傑たるの資格に於て少しも妨あるものにあらず。否其價値の寧ろ增すことあるも決して減ずることあるものにあらざるなり。唯世の常にして矯激異を求めぬこそ却て其更に大なる英雄たり豪傑たる所以なれ。况してや清潔と奢美とは其間大に同じからざる所ありて清潔は必ずしも奢美にあらず奢美は必ずしも清潔にあらざるをや。

木綿の衣服も垢膩に染まざれば可なり、固より錦繡を纒ふを要せず。躰を洗ひ髪を理めて塵埃に埋もれざれば可なり、固より香水に浴するを須ゐず。蓋し身躰を清潔にするは人に見するが爲めにあらずして自家に對する義務なるが故なり。

身躰清潔なれば皮膚の働きをよくし、血液の循環を勵まし、從て全身の營養を盛にす。故に清潔は健康の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

始なり。而して健康は幸福の源なり。身躰清潔なれば人身機能の働きを全ふす。故に清潔は快樂の始なり。快樂は勤勉の始なり。而して勤勉は幸福の源なり。身躰清潔なれば人身機能の働きを全くし從て其秩序を保つ、故に清潔は正心の始なり。又威儀の始なり。正心は修身の始なり、威儀は禮節の始なり。而して皆幸福の源なり。

左れば清潔の德は之を擴張すれば、身に在ては修身の始となり、家に在ては齊家の始となり、世に在ては文明の始となるべし。從て不清潔は常に不健康不愉快不整頓怠惰墮落不規則不取締り不正不儀腐敗無禮の始となるべく、極言すれば身に在ては身の修らざる始となり、家に在ては家の齊はざる始となり、世に在ては蠻野の俗の始となるべし。

是等は勿論其利弊を極言したるものなれども、最も手近き例に於て、日常人の交際來往上に不清潔の爲に他人の愉快を害し又は自家の品位を損ずることの如きは世の決して珍らしとせざる所なるにあらずや。

去れば何人と雖つとめて身躰の清潔を保たざるべからざる中にも、婦人に至ては殊に注意して清潔を保たざれば、忽ちに一家の不秩序不整頓不平不愉快を來し、家庭の平和を破るに至るべし。

支那の古き詩に云く、『伯の東せしより、首飛蓬の如し。豈膏沐なからんや、誰を適として容を爲めん』と。これ夫婿の出陣して歸らざるを婦人が待ちわびたる歌にして、良人の東征してよりは髮もおどろに蓬の如く亂れてあれど、髮洗はぬためにあらず油なきためにあらずして良人の留守故見すべき人のあらざれば誰が爲にか化粧せんとの意、言ひ換ゆれば妻は夫の爲にこそ化粧もすべければ今は夫の留守中故世に化粧して見すべき人のあらざればとの事なり。然るに世には外出の時こそ立波に着飾りもすれ、家に在りてはいとしどけなき

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

姿して在るものなきにあらず。此等の人は此婦人の心がけとは雲泥の相違といはざるべからず。世上幾多の少男少女にして結婚前に相熱愛したるもの丶一旦互に婚を結ぶや彼等が間は秋の風漸くに立ち家庭に波起り遂に其愛を全ふする能ざるに至るあるは、實に此婦人の如き心掛を缺くが爲なると少からざるべし。

たとへ之が爲に或は夫妻の間に厭棄を來すには至らずとするも、此くの如き家庭に育せられたる子女にしてよく怠惰放縦不規則不取締りに陥らざるもの幾何か多きや。注意しても又注意すべき事にこそ。

科學

火星の奇象

（今日は其の觀測時也）

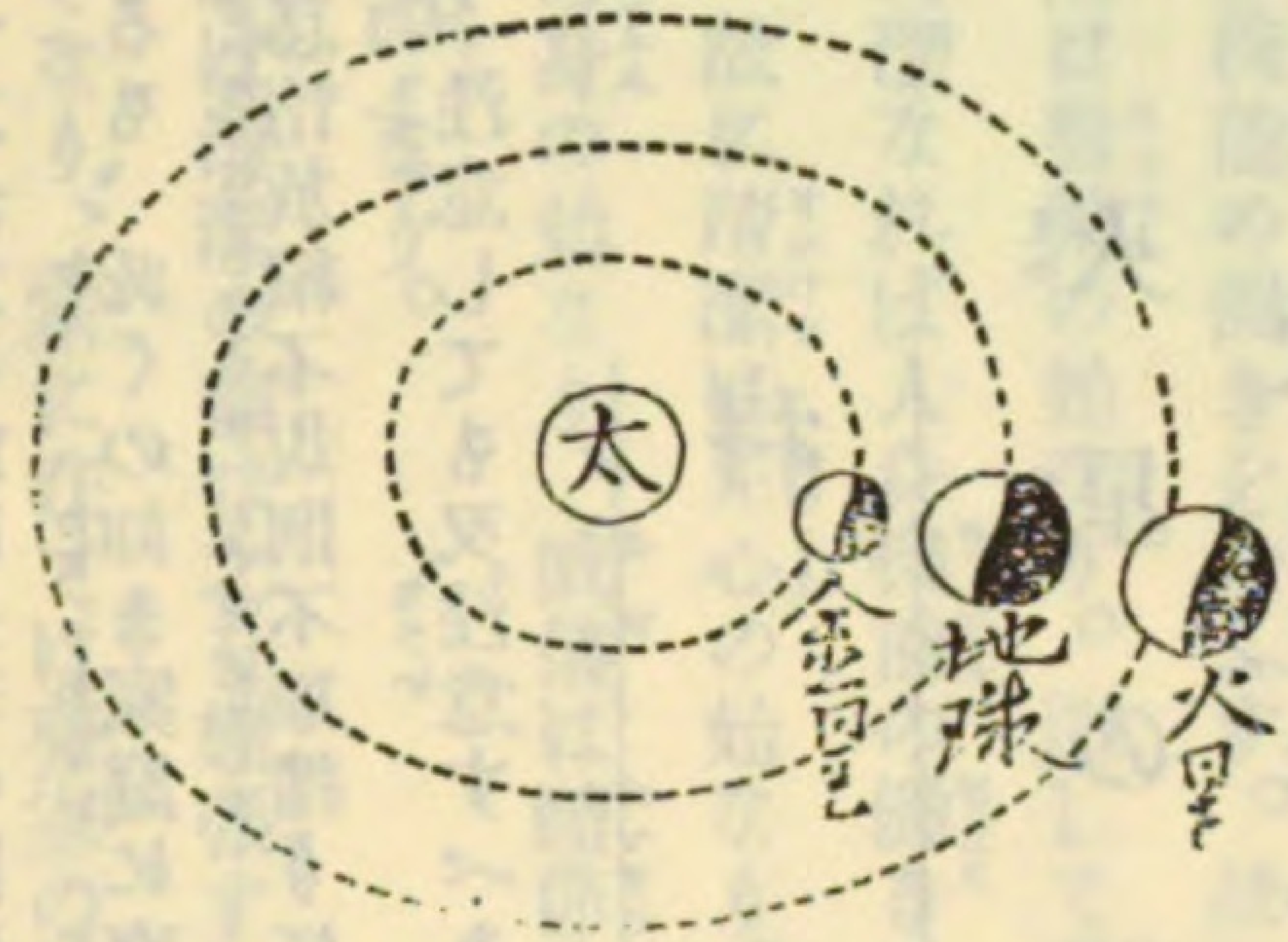
諸遊星の中にて、火星程面白く、注意を引くものはあらじ。そはたゞに、火星の地位が、我地球より觀測する便利なる故のみならず、年々の發見は、益々奇異なる變化を見出すが故なり。

近かさより云へば、金星は遊星の内にては、最とも地球に近かく、僅か二千六百萬哩の近かきに至ることあり。

又たその大さも、殆ど地球と同じくして、地球の直徑は七千九百哩あり、金星は七千九百二十六哩あり。之に引き更へ、火星は三千五百萬哩より、近かく來らずその大さも、殆ど金星と他球を合せたる位あり。然れども近かしと云ふ金星は、地球よりは太陽に近かき軌道を廻るが故に、たとへ最も地球に近かづきたる時と雖も、第一圖の如く、地球はその黒面を見るのみ。少しく明るき時と雖も、緋の如き色に過ぎざるを以て、何の觀測も爲し得ざれども、戰の神と綽名されたる火星は、圖にありて示めせる如く、誠に美わしく、その

明かるき半面を、滿月の如く、皎々と光からせて、地球に顯わすが故に、之れを見るには最も便利也。

第一圖



火星は我地球が其軌道を二回餘り廻る間に、漸く太陽を一回するが故に、地球が此の星に出遇ふは、二年と四十五日目にあり。元より行星の軌道は、『ぶんまはし』にかけたる如くならで、小判なりに偏平なるが故に、二年目に相出で遇ふ時と雖も、調度近き所にて出遇ふともあり。叉た遠き所にて出遇ふともありて、一定せず。近かき時は、三千五百萬哩に達すと雖も、遠き時は六千二百萬哩に至るあり。

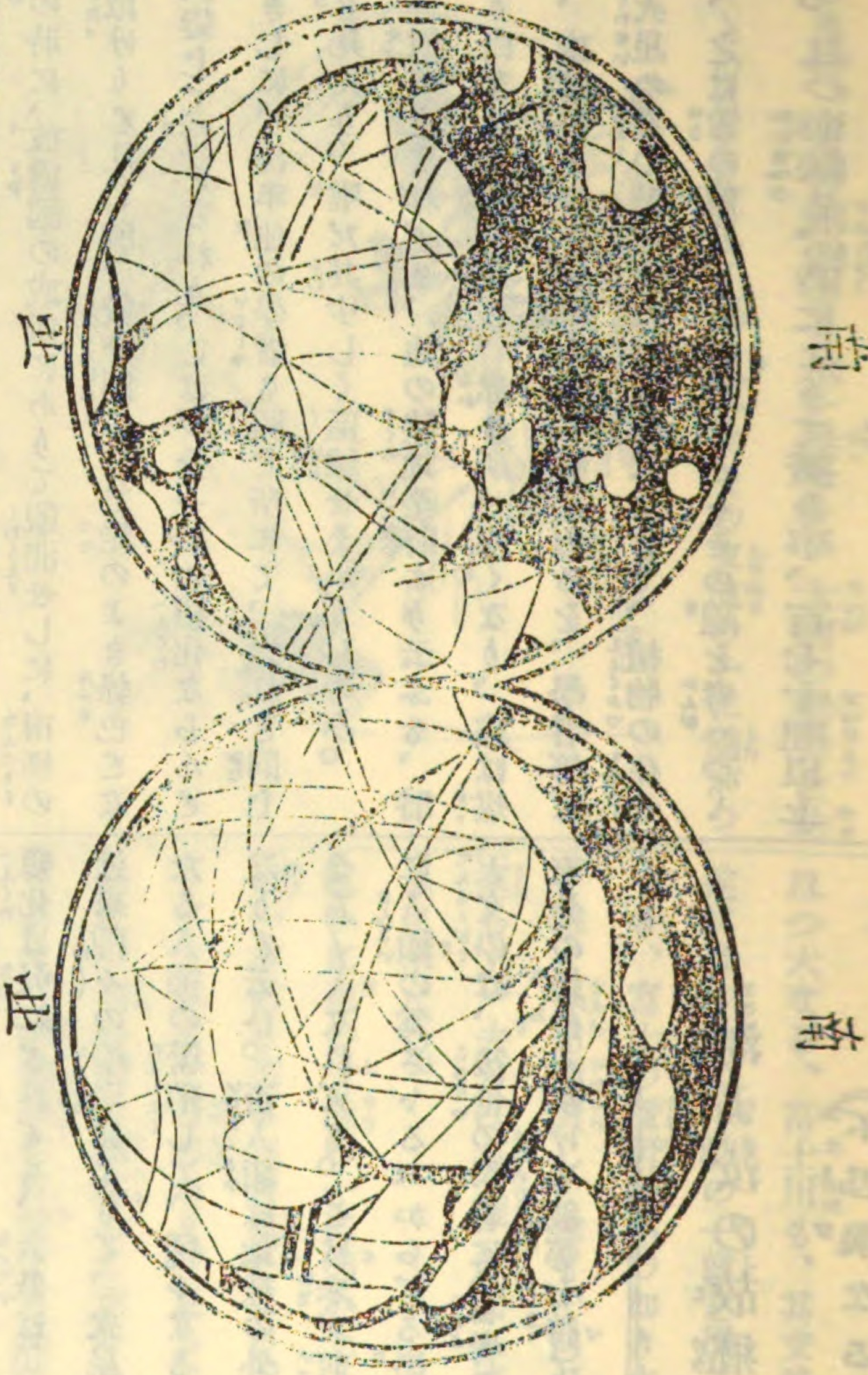
殊に注意すべき一事あり。元來遊星は、年々同じ黄道を通行するが故へに、常に同じ星宿の間を通過すと雖も、我地球の地軸が、斜めなるを以て、一昨年の如きは、合衆國の計算によるに、同所の處によりては僅かに二十八度より三十二度を過ぎざりしが、今年は五十七度の距離となれり。今年は火星の地球と出遇ひし年にして、去る十月廿日は最も近きつじなりき。火星は其出遇ふ前後數週間は、之を觀察するに宜しと云へば、今月中は猶ほ之を觀測するに遲からずと知るべし。

數百年以前より、多くの天文學者は、此の星の觀察に力を用ひけるが、その面に黑き所や、光りたる所のあるを見て、或は雲のかゝれるなりと云ひ、或は然からずと云ひて、種々なる議論ありけるが、年々畫がき合わせる處の諸學者の圖の、同じ所多きより、年々進歩する器械と、人智とにより、遂に千八百七十七年に至たり、シヤパレリー氏、六十二個の圖の全く相合せし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ものと、五十二個の圖のほゞ相似たるものを參考して、一の定まりたる圖を作りしが、それより漸々年を逐ふて、天文學に大進歩を來たせり。今日に至りては、此の星の半分以上、即ち淡き色なる所は陸にして、黑き所は水なりと云ふ説に反對する人は一人もなし。且つ

第二圖



北の半球は、殆ど陸にて滿ち、南半球は多く水にして、水の中には、多くの島あり、陸には縦横に網の如くなれる數十の海峽と、海や、湖水等あるを觀測し、一々名を命じあれば、今日天文學を修むる人は、火星の地圖の名を覺ゆるのみにても容易き業にあらず。年と、人と、觀察せる地とによりて、多少の別はあれども、水と定られたる黑き中にも、青き所あり。陸と定められたる淡き所にも、ヤング氏は桃色を見、バナル氏は橙皮色を見、フレメリオン氏は麥の熟したる如き色あるを見たりと云へり。其變たる色

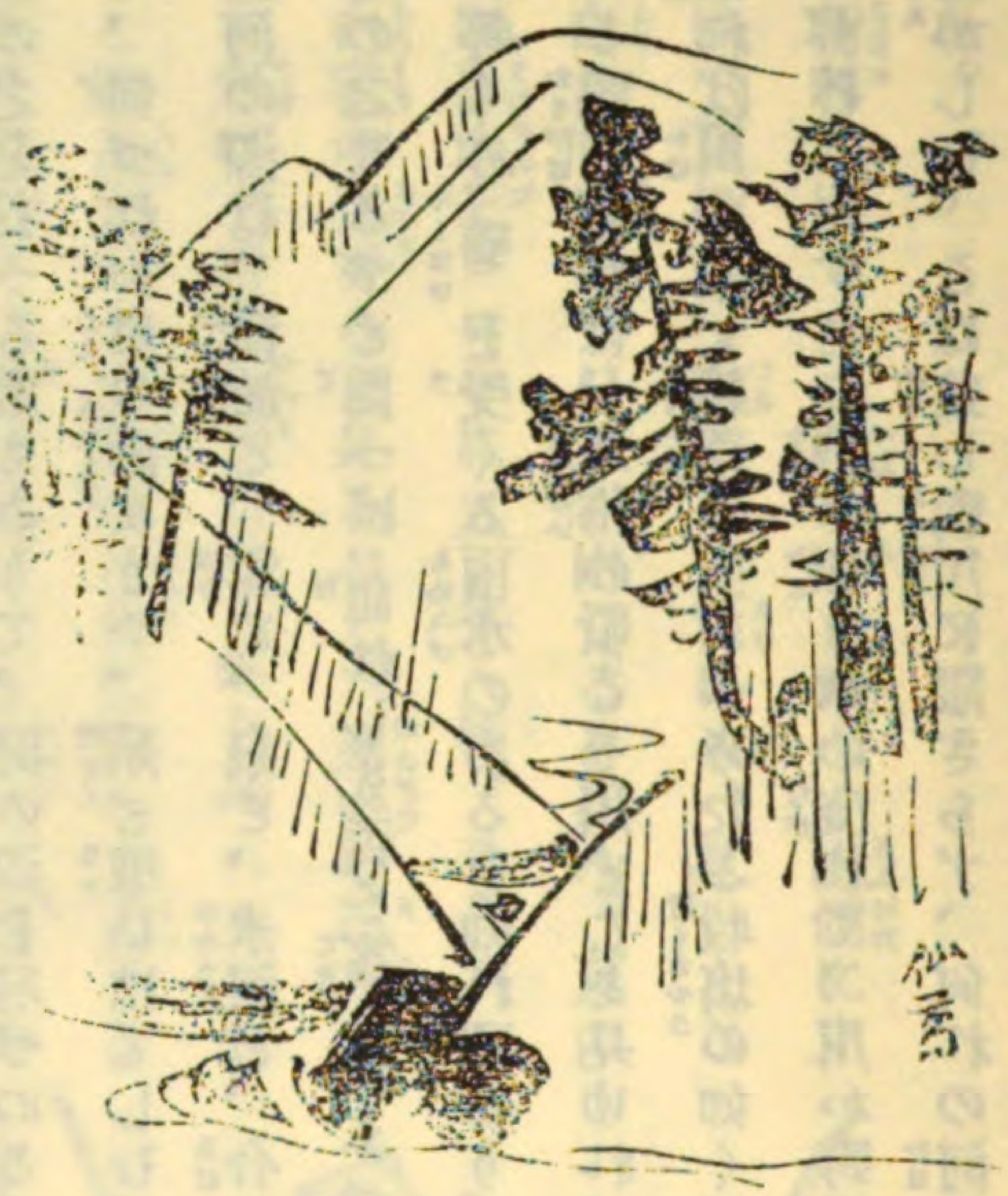
と云も、常に同一なるに非ずして、時には數日にして變るとあり、又數年變わらざるとありて、頗る學者を惑せり。たとへばピカリン氏の如きは、千八百年の火星面會の時に、彼露國の或所にありて觀測せしに、南極の雪を戴けりと見し所、數分間にして艶のよき綠色となり、又變じて黄となれり。こは多分一時の變化ならんと捨置きしに、後年他の學者も同じ所にて、之れと同じ現象を見たり。唯だ其少しく區域せまかりしのみ。こは一説のとなれども、他の陸地全躰より云ふも、時により白き所、青くなり、赤き所、黒くなり、或は煤ばけ、或は黄となり、種々なる變化あるを、學者等は之は火星の嵐の時、之れは氣候によりて、植物の生ぜし時、之は雪の解けし時等と、一々その理を考へつゝあり。且つ海峽も、時によりて廣き事、百七十哩以上に達するとあり、時によりて僅かに三十五六哩の事あり。又た海峽の兩岸も、岩石巍々としてけわしき時あり。小さき何物か所々に散じたる時もあり。又は或る陸地の全く見へざる事あり。同じ海峽が同じ地位に二本出來る時ありて、畫き定めたる地圖も、常に多少の變化は免れざれども、大低は第二圖に示めせる如し。近來種々の學者によりて、火星には地球よりも進歩したる人種の繁殖して、種々なる變化をも作りつゝあるなりと云ひ。否人類は地球の外になしと云ひて、議論まち／＼なれども。こは未だ何れとも判れず。要するに人類の爲さゞるべからざる事業の澤山ある中にも、天文學は、後世の學者に、名譽なる發明を與ゆる爲め、充分の地位を明けて彼等を待てるなり。

河よ汝の故郷は何れ

（不思議なる天地の變化）

いざ是れより河の源を探ぐらん。海に注ぎつゝあ

る大河を、其源にくと遡りて探ぐらんに、算ぞへ盡きせぬ支流、人躰に例ふれば血管、木に例ふれば枝の如きもの、その兩側より水を注ぎて、大河の勢力を助けつゝあるを見るべし。更らにその支流の一に随がつ



て上り行かんに、支流には又た更らに、小さき支流あり、其支流の支流には、又た支流ありて、尚ほ遠く遡ひ行かば、遂には谷間の小川となり、其小川は、木の葉、一葉によりて、見へつかくれつしつゝある、いとはかなき纖流となる。かゝるが故に、水勢急にして、且つ大なる、富士川も、其支流をたどりて進む時は、遂には少女の下駄の一齒を以て、容易すく堰き止め得べき、富士の麓野の糸の如き水となる。利根川大なりと雖、隅田川廣しと雖も、何づれも源なくしては出で來らず。去らば其源は必らず細そき溪流なりやと問ふに未だし。

試みに他の支流の一に遡か上りて、見よ。末は遂に小指一本にも劣るべき泉となる。されば泉は河の源なりやと云ふに、否尚あり。更らに他の支流に遡りて上る時は、河の源は湖水かと思わるれども、その源は未だあり。我國等には餘まり見ざれども、音に名高かきゼルマンのライン河、之に並らべるローン河等源に上りて見よ。草鞋付けたる足も、驚ろきて踏み止まり、ハ、ア河の源は氷田かと叫けぶべし。そはローン河の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

源は、第二圖に示めせる如き氷の原、むしろ氷の川とも云ふべき恐ろしきの河の中に流がれては解け、解けては流がれ、絶へずその水を作れるなり。或る川は又た雪の之を養へる處もありて、河の源を尋づぬる人をして、何づれが眞の源なりや、殆ど惑ひはてしむ。然らば河の源は、溪流と、雪と、泉と、氷河と、合せたるもの之なるやと問へば、誰れしも否と答へ給ふべし。之れ等も亦養を受くる雨水のあるを知ればなり。有名なる鴨川の水は、入梅の頃こそ川とこそ見ゆれ、夏に至れば川は殆ど雜草の生へつめたる牧場の如く、中に一すじ二たすじの帶の如き水の流れて、川か野原かと驚かしむ。こは盖し鴨川に限ぎらず、何れの河にても、雨の少なき時候には、水の涸るゝを見るは屢々なり。されば雨ぞ川の源なれと云ひ得べきや。否々雨も雲なき青天よりは降らず。必ず雲より生ずるを知る。されば雲とは何ものぞ。鐵瓶の口を見よ、沸き上りたる鐵瓶の口に接したる直ぐの所は、色もなく、形も見へざれども、五分か一寸以上を離なれたる所には、白き烟の如きもの立ち上るを見ん、これぞ尋ぬる雲たるなり。如何なれば見へざる氣の、見ゆる雲と變ずるやと云ふに、鐵瓶の水は熱に遇へば、透明なる蒸發氣となるが故に、その口より逃がれ出づる時は、未だこの蒸發氣にてあるといへども、少しく登らんとする中途に遮へぎりたる冷氣は、そのまゝにては通行をゆるさず、故に忽ち容がたを變じて少さき粒ぶ〳〵となり。此に雲の名を得て空中に飛揚するなり。さて空中に登りたる雲は、行く先き如何になり行やは、手近かき試驗によりて知るを得べし。

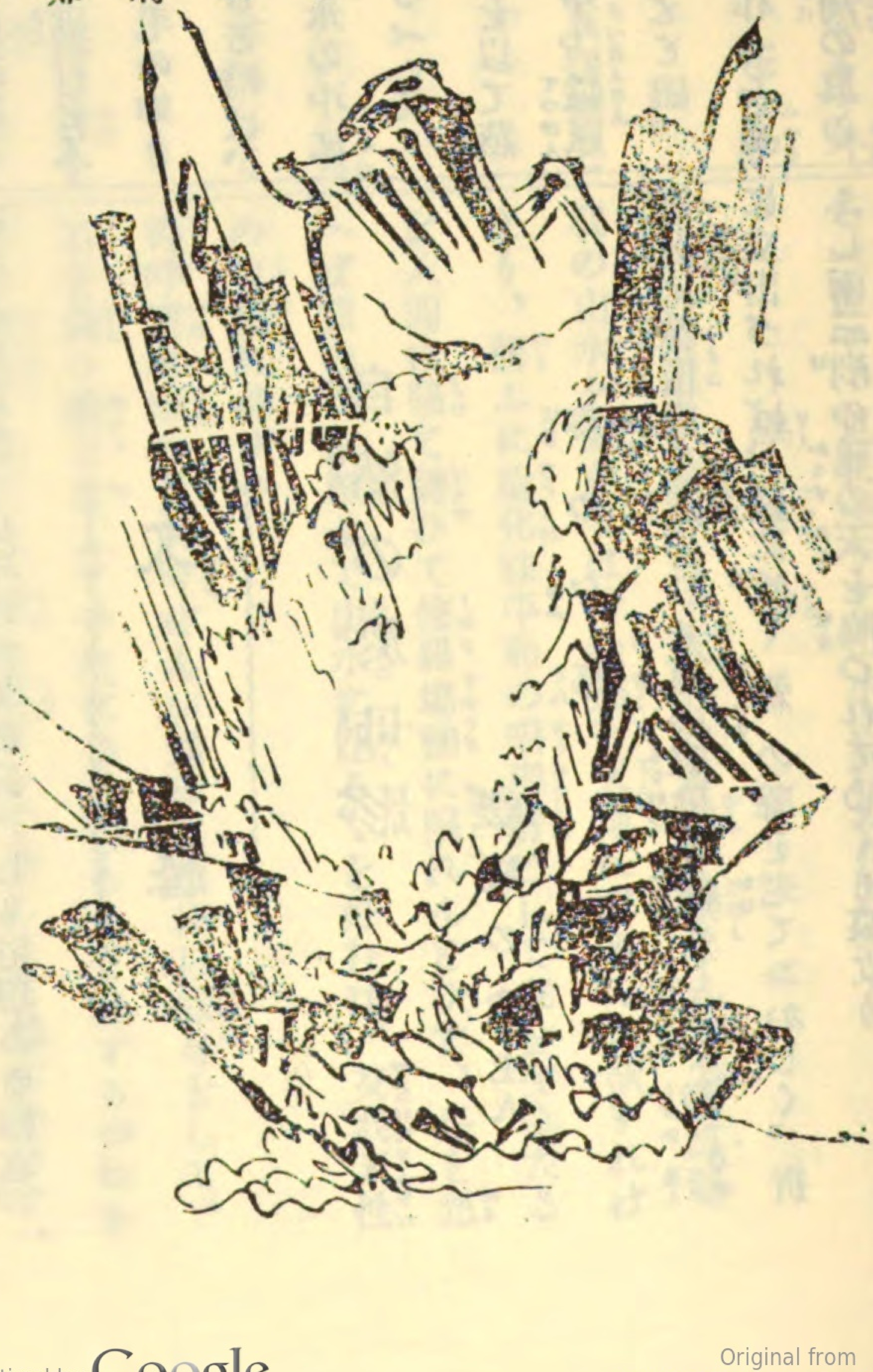
今管の一端を沸騰せる鐵瓶の口にさし、他の一端をアルコールのランプの焔に近かくに導びき置くに、鐵瓶の中より出で來りたる蒸發氣は、熱のために吸ひ去られて、再たび出でざるべし。これと仝なじ理により

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て、天空に登りたる蒸發氣も、乾燥せる青天、殊に熱度高かき日には、熱氣の中に消へ失せて、雲とならざるべきも、濕氣ある蒸すが如き天氣には、空中に混じ、消ゆべき餘地なきが故に、雲は何時迄も長く空中に掛かる也。

冬の朝起き出で丶、顔を洗らわんと椽側に立つ時は、夏にも春にも、秋にも、見しとなき、白き呼吸の、口より出づるを見ん。夏の暑天に氷水をコップに入るゝに、コップの外に白雲の生ずるを見るべし。寒中の汽車のガラス窓は、窗に烟を以て外を見へさらしむ。これ温たかき空氣の冷氣に遇ひて雲となりしものにして、何ほ甚だしき冷氣に遇ふ時は、更らに雪となるなり。現に福島中佐の如きは、ロシヤを通過の折、呼吸はすべて氷となり、馬の背より發する蒸發氣は毛の上にて霜と化せ

るを實見し給へり。かゝることは寒國にてはめづらしきことにあらず、エルヅロームの如きは、地中を堀りて作りたる馬舍の戸の、明きたる時、又はロシヤの舞蹈會の窓戸の明きたる時等には、舍內屋內に時なら



ぬ雪を生ずるとありと云ふ。是等の話なしは、我國の

如き溫國にては、一のめづらしき話の如くなれども、若し時ならぬ雪を見んとならば、我國にても出來得べし。瓶の中に氷の碎きたるものと、鹽の一と匙計を入れて置く時は、見る間に瓶の外部は、氷りの毛の如きものにて衣を付け來るべし。之を取りて固たむる時は、時ならぬ雪球を作り得べし、若し又その瓶を水の中に入るゝ時は、瓶の周圍は美くしして氷の環を作るべし。されば雲を作るには、先づ熱を要すべし。熱を以て蒸氣を作り、之を氷らしめて、初じめて雲を生ず。鐵瓶の口より出づる蒸發氣は、炭の火より作るなどと雖、天地間の大蒸發氣は、凡て太陽の熱によりて作くらるなり。かく源より、源を遡ぼりて行く時は、川の眞の源は太陽なりと云わざるべからず。言葉を變へて云へば、最も冷めたき水、或は氷、雲等は、最も熱き太陽の熱によりて作られ、最も大なる大洋の怒濤は、最も少さき一滴のむしろ雲の一粒より生じたるなり。天地の變化こそ實に一の『奇跡』なりと、有名なる先きの理學者チンダル氏が、少年のために云へしも道理ある語也。

文藝

自然の於母影

春の夕暮

嵯峨のや主人

閑庭に花散敷て春の日も西の森陰に傾きし頃、靜に椽に立出づれば、藪に啼く鶯の聲を老ておかしく、折ふし兩三羽の鴉の天を鳴つれてゆくも哀なり

手をのべて一輪の櫻の花を摘み、之を愛して接吻すれば、露の香る其一片は、我脣に附きて離れざりき、嗚呼我の花を慕へる歟、花の我を慕へる歟、此時風も我一片を奪ふ事能はず、既にして細に殘片を咀んで庭

除に吹けば、花は紛々として六花の舞ふが如く散亂る

　月出ては心無窮を想ふ

既にして月杉の梢に昇りて、風にゆるゝ葉陰の紙窓に往來するを見、徐ろに前庭に降りて微吟徘徊すれば、夜の風は來て冷に衣を吹く試に垣の疎なる隙より外圃を眺むれば、月は菜花を照して白露影淸く、花は妙香を送りて人の心をして醉はしむ

嗚呼薄霧、朧月、夜涼、閑庭、之に對しては哀怨禁じ難く、心無窮を想ふて人事の定りなきを歎ず。

　夜深ては想翼を生ず

既にして夜深け人靜りては寂として物の音もなし、月は天上に在りて其孤輪を悲しみ、我は地上を徘徊して其孤影を哀む

此時想は翼を生じ、我を乘せて四方を翔る、或は往を顧み、或は來を想ふ、往を顧みれば淡きこと夢の如く來を想へば漠たる事霧に似たり

若し夫れ現在を現在として思へば、我は蜉蝣の一生を天地に寄せて、葉末の露に五分の魂をわなゝかする寸餘の虫のみ、東西南北に匍匐て露を吸ひ月に吟ずるに疲れ、今我運の拙きを悲しむも、誰歟我を哀む者のあるべきや、更に去ツて山水に遊ぶに若かず。

　旅情動く

籠鳥の雲井を慕ふは、天與の自然を樂まんが爲なり、我の山水を愛するは、和樂を天地に求めんと欲すればなり、想ふに造化は平和の唱導者として我を生みたるを人間は强て誘ひて修羅場裡に陷れんと次す、是を想へば我の世を厭ふて山水に隱るゝを好むは、又我天性の自然に非ずや

嗚呼露に歌ひ月に吟ぜんが爲めに生れし我身をして、石を荷ひ薪を負ふて千里にゆかしめんと欲するが如き世の無情を見ては、我は忍ばんと欲しても忍ぶ能はず、鬱勃たる胸中の不平の、凝て幽愁暗恨となるを如何に

とやせん其不法の逆綱を遁れんが爲め、一飛山水の景勝を愛して、清爽潔白の天地に遊ばんと欲するも、又止み難き情願ならずや

旅行

幸なる哉、我寺の一室を借りて住みしより、麥飯を食せるの功は著く現はれて、脚氣の病を頓に愈ぬ、いざさらば何れの地に歟遊ばん、懐の錢は輕しと雖も其盡くる所まではゆきなん、と五月上旬常總の地に向て遊ぶ

利根の河原に追手の風を孕ませて白帆の影の走りゆくを眺め、船橋の浦にたく塩烟のたなびきて、網引の業の辛きを思ひやりつ、日も西山に沈む頃、印幡の湖の邊をゆけば、湖畔霧渡りて佐倉の城下も幽に見ゆ

斯て其夜は佐倉の市に一宿して、明れば宗吾神社に詣て、其より成田の不動に到る、嵐を路傍の賤ヶ家に凌ぎて、風の靜まるを待ち、新津の村より小舟に乗りて、葦の葉の露を漕分くれば、遠山の暮煙の中に遠かりて船新川の驛に着く

此行霞ヶ關より水戸に遊ぶの考なりしが、思ひの外錢を使ひ過したれば、之より空しく歸京せざるべからず、殆んど何の爲めに此處までは來にけん大笑ひなり

夜に入りてより風吹出て雲を散しぬれば、天は名殘なく晴渡りて、微月寂し氣に西の天にかゝれり、窓に凭りて前面を眺むれば、刀寧の長江は微月に晃めきて野面の氣色もいと寂たり

忽ち伊軋たる柔艣の音寂しげに聞えて、一艘の舟煙波の中より現はれ來りしが、又煙波の中に向て去りぬ、船の過ぐる所、細波一痕の月を漂はして、影白糸のゆらぐが如し

船ゆき去りて後は物なく、四下亦寂寥たり、忽ち聞く船歌の聲を煙波の中より飛ばし來るを、其調怨むが如く、訴ふるが如く、又慕ふるが如く、坐ろに人の心を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

して悲しましむ

嗚呼彼船、彼は是我故郷の方を經て來りし者に非ずや此河、彼も亦我故郷の方より流れ來るなり、遊子之に對して、如何ぞ故園の情起らざらん、我心は波立てる如く故郷の戀しさを感じぬ、去りて其戀しさを故人に語りたくなりぬ

嗚呼我が五歳の時なりき、曾て家嚴につれられて刀寧を渡れる時、我は船中に在りて兩岸の動くを見、河てふものは不思議のもの哉土堤も廻はる、家も廻はる、と思ひて其理を家嚴に質せば、是土堤の廻はるに非ず、船の動くなりといふに一驚しゝ事もありしが。又曾て家兄に誘はれて此河に魚を釣り、家兄の獨り巧に釣り擧ぐるに、我は拙くして空しく餌を取らるゝのみなるを悲しみし事もありしが、曾て又家兄及び二三の朋友と刀寧を渡りて永井戸の山に遊び、家路に歸るを忘れて叔父に叱られし事もありしが、嗚呼、其家嚴も、家兄も、叔父も、今は皆亡き人の數に入りぬ、我は幸にして、將た亦不幸にして、空しく世にさまよふと雖も、孤身煢然として伴ふ人もなく、幻の巷に春の夜を悲しむの客のみ、と茫然として前頭を望めば、月は既に西に落ちて夜の風冷かなり

斯て夜明て後此驛を立出、刀寧の河邊に添ふて歸途に就けば、船の霞を乘せて波上を往來するもあり、農夫の脛を田中に沒して稻の植附にかゝるもありけり

大森の驛より道深林に入れば、晩春の天は其一端に早く夏の風情を匂はしながら、翠なる新樹の梢より笑ふが如くさし覗けり

白井を過ぎて鎌ケ谷に出ぬれば、春の日は全く西に沒し、月さへ入果て暗くなりぬ、足下危けれど、尙靜に暗がりの閑路をたどりゆけば、路傍なる小川の水は蕭々として音涼しく、立並ぶ大樹の陰よりは大空の星螢の如く晃めけり

八幡の藪も見るに由なく、疲れし足漸やう重く、市川の驛へ出てしは、夜も早十二時にてもありつらん歟、渡頭に立て船の出づるを待てば、又對岸の一燈幽にして夜の風冷かに面を吹く

刀禰を渡りてよりは、夜の明方に東京へ入らんと道を急ぎしが、此日草鞋食の出來しより足の痛み堪がたければ、路傍なる人家の軒下にねる、風露梢冷かなりしも、旅中の疲勞に一睡を催して不覺の唾に就く

斯て曙の天のほの／＼と白み渡れる頃、我夢破ぶれぬれば、横雲の棚引ひまより匂やかに輝きのぼる太陽の光に飛翠りつ、香靄模糊たる朝霞の中、遠村近落の去來するを眺めて東京に入る

寺を辭して歸宿す

其後は足の病も愈いへぬれば、まだ幾日もあらず寺を辭して神田なる元の下宿へ歸る、此時春もやう／＼暮て、夏の初となりぬれば、市中は夏物の仕入に急がしく、氷屋の店頭ラムネの德利輝き、水菓子屋の店前桃李實を帶びて小兒の心を惹きつゝ、全都何となくにぎやかにぞなりける

秋の山づと

秋山生

去る天長節は、此祝節の始まりし以來またあるまじき目出たき好き日なりければ、記者も快よく遊びて此祝す可き日を祝し奉らむと、早朝甲武鐵道に乘りて八王子に赴き、武甲二州の境なる高尾の山に登りぬ。

久しく都門を出でざりし間に、秋は何時しか老ひて、地は錦の如くなれり。黄禾穰々波の如く畝より畝に漲れる、柿櫨などの紅葉したる、葉隱れに玉の如き柿の實の輝やきたる、京菜大根の青々と美しき、甘藷畑に枝ぶりおもしろき松の兩三株生ひ出でたる、滊車の

上の眺めも亦言ひ難き趣味あるなり。八王子を過ぎて高尾に赴くの路、路を挾む桑畑の桑葉秋風に老ひたる、道傍の茅舍に機織る音坐繰の音の絕間なき、古びたる草舍の屋根に杖もたはゝに赤く熟したる柿の實の繁生せる、所々の籬に黃菊白菊さま〳〵の菊の十分に日光に浴びて豐かに笑みこぼれたる、家の前をチヨロ〳〵流れ行く淸き細流、細流のほとりに藁莚敷きて籾を乾したる、細流に影映して黃菊の立てる傍に鷄の咶々喔々餌を啄みもて步める、秋の日のまともに當る椽側に粟乾して其傍に白髮の老媼が孫の頭を膝にして髮剃り居れる、途中の眺め亦實に述べ盡されぬ趣味あるなり。平遠盡きて山漸くに出で、行手の山に一叢の黃葉染むるが如く秀でたる、山の懷に入りて仰げば深碧の空は千章の松の綠に映じ一團の白雲の彼巒の樹間に隱見する、孤松一株兩株山背に秀で立てる、蔦色に焦れし一叢樹黃葉せる七八株の畫ける如く翠林青巒に映りたる、松風にまがふ谷川の音、木蔭の冷氣汗ばみしたる面に快よき所、空山人無ふしてサラ〳〵と落つる落葉人語に似たる處、老樹の間より青空のほの見へ綠葉の間に朱實の輝ぐ所、林を隔てゝ人語を聞き久ふして人に逢はざる所、風瀑布の響を吹き斷つの時、名を知らざる一鳥不意に頭上を鳴き過ぐる時、九十九折の山路落葉栗殼に埋めたる所、山頂より遙かに廣濶たる武藏野を打眺め、粉壁瓦光の町を認め、銀蛇の如き玉川の流れを指さし、海の如き稻島の如き村を指點し、遙かの彼方に此處其處立ち上る煙を指す時、木の葉を分けて早き紅葉の一枝を折り、湍に嗽ぎて石に躋し、草花を尋ねて馥々たる落葉を蛇かと疑ふ時、山中の趣味亦實に言ひ盡し難きものあるなり。

幼稚園兒女歌ふて曰く、

　秋の山邊の樂は、
　松蕈、初たけ、ひめぢ蕈、

栗の實、椎の實、熟し柿、
御土產かつひで皆さまへ。

記者も登山せる甲斐に、讀者諸君に山づとに何か參らせむと思ひしも、松茸初たけひめぢ茸は此山には見出されず、栗は老ひて、椎は幼なく、偶ま見當りし熟し柿すら、梢高ふして攀づるにたへず、即ちこゝに話のつとのみ參らすことゝなりぬ。

此日は誠に美はしき天長節なりき。八島の內に日光のあたらぬ隈もなければ、喜び祝はぬ家もなく、稻刈り乾す田の面の畷が舍にも日の丸の旗秋風に打戰ぎ、少しく人家ある所には晴衣を着たる子女樂しげに戯れ、兵隊帽子紫袴の小學生徒の運動會も多く見受られ、眼中の景渾て豊かなる欣ばしき有樣なりき。記者は黃金を敷ける田の面を眺め機の音を聞き桑の葉を見ては國の富の基を思ひ、花の如く輝やく小學生徒を見ては他日の國の基を思ひ、白髮美はしき老翁老媼の健やかなるを見ては彼等が一生に驚く可き變化を閲して此喜ばしき日に到れるを思ひ、此等の靜かなる村々より如何に猛き武夫が出でゝ遠征の軍に從ひ此等の旭旗立てたる茅屋が如何に多くの無名の君子無名の英雄を藏するを思ひ、而して斯く誠實に祝はれ玉ふ君王の如何に英明剛健にわたらせ玉ふかを思ひては、何となく心躍り、また轉た清國の狀態を思ひ憐れむに堪へざりき。」

記者高尾山を下り、夕陽に紅葉の一枝さし翳しつゝ歸途に上れる時、少し隔りて川邊の打開きたる場所に高く五彩の色の輝やくを見、人多く寄り集ふ物音を聞けり。近くまゝに能く見れば、此は此あたりの田舍小學校の運動會なりき。山舒び水緩ふなりて川邊の草原平かなる所、中央に靑竹立て頂上に我國旗を翻へらせ、國旗を中心として四方に繩を張り世界各國の彩旗の紙にし製したるを隙間もなく掛け列ね、東には一樣に赤帽被れる十二三乃至十四五の兒童數十人、西には一樣

に白帽被れる同齡の兒童數十人、二三十間相離れて相對し、白帽隊の後邊には紙にて製したる城樓の雛形高く建てたれ、敎員は其間に往來周旋し、一方には村の男女老若學校の女生徒壁の如く立ちて見物し、往還には赤毛布被て手拭に頰かぶりせる馬士馬をとゞめ荷車を引く男は車をとゞめ腕を拱いて見物せり。思ふに赤帽は是れ我日本軍、白帽は是れ清國兵、後邊の紙城は是れ鳳凰城か奉天か北京にて、赤軍進むで之を拔き火を放つて一炬焚き盡す趣向とは知られたり。

時に高尾の頂にかゝれる夕日は雲の間より一道の光の流れを漲らせ、草の原を縫ひ行く野川は金板の如く輝やけり。眼を擧ぐれば高尾の連山綸の如く、前なる一丘は黃褐に染められて靑松兩三其上に孤立し、色々に色づける草の原には彩旗の色紅白の帽の色少女が着たる衣の色一齊に相映じ、眼もあやなる計りなりき。記者は久しく立ちて此面白き光景を眺めたり。列をなして立てる兒童は勇氣勃々自ら制する能はず、逸る競馬の馬の如く一騎列を出でゝ走せかゝりてはまた退く者もあれば、腕を揮ひ身を動かし心は疾くに敵軍に向つて馳する者もあり。見物はドヨミを作りて、來らむとする戰爭を待ち、馬士も車夫も煙草吹き／＼日清戰爭の話して之を見る。斯る間に日脚西に傾きければ、行く手を急ぐ記者は終に清城燒夷の快擧を見る能はざりき。然も一塲の光景、深く感を動かし、斯の如く活潑なる兒童を有し斯くの如く國民的精神を有する田舍漢を有し斯の如き馬士車夫を有し斯の如き老若男女を有する我日本國が、腐敗する清國を懲戒儆醒し、東洋に覇たるは、誠に偶然ならざるを感ぜざる能はざりき。

昔者ウオトルーの戰に奈破烈翁を挫きし英國の名將ウエリントン、嘗てイートン學校に於て兒童の活潑に遊戲するを見て、快然として曰く、ウオトルーの戰は實に此處に於て勝ちたるなり」と。記者も亦秋の夕

日の照らし出せる此一塲の愉快なる光景を見て、成歎豊島平壤黃海鴨綠其他已に獲たる勝利まことに得可き勝利の、實に斯る片田舍に於て獲らるゝ事を思はざるを得ざりしなり。

小兒星を夢む

ヂッケンス作
志川生譯

さるところに小兒ありけり、かれは常に伴侶なる其妹と共に村のあちこちをさまよひつ。かれ等二人はあたりの物事にふれて不思議の思をなせり。花の美、空の高さと、その青き色、透明なる水の深きあたり、はては此樂しき世界を造りたる神の善き事と、其力の高大なるを見ていたくいぶかりあへり。

二人は折々云ひける樣、かりに此世界のおさなご、凡て皆な死せりと思へ、かゝれば花と水と、かの空は悲むべきや否や。

二人はたしかにしかりと信じたりき。

二人は云ふ、蕾は花のおさなごにして、小山を流れ落る、悪戯兒のかの小川は、水のおさなごなり、空に高く、よもすがら投擲戯して遊び居れる、かの小さきかゞやける光は、たしかに星のおさなごなり、かれら若し其伴侶なる人のおさなごを失ひたらんには悲しむべき事言ふまでもなかるべしと。

夕暮頃に墓所の上、寺の尖塔のあたりに、登りくる奇麗なるかゞやける星ありけり。二人はおもへらく、此星はあたりのほしよりも、まして大きく、またまして美はしゝと、斯て夜毎に二人は窓のあたりに互に手を取りて立ちながら、此星をながめたり。先づ此星を見あたりたるものは『吾かの星を見つ』と叫ぶ、時には、また二人が共に叫び出すこともありき。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

斯て二人は星を友として成長しつ。夜毎にふしどに入る前には『はやく眠れよ』と云はんとて再びかの星をながめ、さて後ふしどに入らんとてあたりを見遣るときに、かれ等はつねに『吾星安かれ』と云ふ。

此兒のまだ幼なかりしとき、妹ふと失心してより、其躰いとかよはくなりて夜來れども、窓のあたりに立つ事能はずなりぬ。かゝれば此兒は獨りかなしげにながめつゝ、星を見ては振り向き、臥床に横はりて、青白き顔した病者に云ふ、『吾かの星を見つ』と、かくて病者の顔には微笑出て來て、さゝやかなるかよわき聲音に『吾兒、吾星と安かれ』と答ふ。

やがて悲しき時は來りぬ、思設けぬ程速に來りぬ。かの兒はたゞ一人さしのぞけど、臥床には一の人顔なく、墓地には前になかりし新しき墓の、多くの古き墓表の間に立るを見る。かれは涙ぐみたる目もて星を見遣るときに、かの星の光は長く彼を射る。

星の光のいとかゞやきて、一道の光線の天上より地下に通ずるが如くに見えつ。此兒がさびしき臥床に入りしときに、かれは此星の夢を見たり、かれはいつ地にか横はりながら、かの光輝ある道をば天の使に導かれて登り、行く人々の一行を見たり。星は戸を開きてかれに大なる美はしき世界を示しぬ。其處には同じ風なせる天の使の群ありて前の人々を導かんとて待ちつゝあり。

そこに侍る多の天の使は、此星の方に導かれたる人々に其かゞやける眼着をばむけつゝ、其群の內より一人の天の使出で來りて、人々の首のまはりに降り、やさしげに、かれ等は接吻す、かくて此人等と共にかゝやきたる並木路を下りつゝ、此上もなきたのしき樣に、此兒は其臥床にふしたるまゝ、喜のあまりに泣く。

されど天の使の內にも、此人等と行かぬ幾多のむれありて、此內には彼がかつてより見識たるがありけり。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かつて臥床にありし病者の顔は、今は一層威ありてかゞやけれど、かれの心にはたしかに此多くの天軍の内に其妹を見つ。

かれの妹は星の入口のあたりにたどりつゝ、此處にさきの人等を導き來りたる天の使の先導者に問ふて曰ふ、『吾兄は來りしか』と、先導者はかれに『否』と答ふ。

其妹のよろこばしげにかなたにふり向きたるとき、此兒は手を伸べて、叫んで曰ふ、『オヽ、吾妹よ、吾は此處にあり、吾手をとれ』と、妹はかれの方に其かゞやける眼着をば振り向けたりと見しが、あたりは暗く、夜もいとふけたり。星の光は室の内に入り來りて、かれの方に長き光線をば送りつゝ、かれは涙の内に其星をながめたり。

此時よりかの兒は、かの星をば、時來れば行でかなはぬ家の如くに思爲して、其身の只に地上のものならず、またかの星の内のものなることを思へり、これ其妹の已に其處に至りしを見ればなり。

後いくほどもなく、此兒の弟なる嬰兒生れて、また得語らぬ程に、已に其せしき躰軀をば臥床の上にのべて死にき。

再びかの兒は天の戸開きたるかの星と、天の使の群と、人々の一行と、またかの輝ける眼着もて人々の顏をながめたる天の使の群とを夢みき。

その時、妹はまた前の先導に問ふ、『吾兄は來りしか』と、先導は答へて、『汝が云ふ兒は來らねど、弟は已に來れり』と云ふ。

かれは其弟の其妹の手にすがれるを見て、叫んで云ふ、『吾妹よ、吾弟よ、吾は此處にあり、吾手を取れ』と。かくてかの女振り向きてほゝゑめりと見れば、星は依然としてかゞやけり。

かれ人となりて後、其著書にいそがはしく從事しけ

るとき、老ひたる下婢來りて云ふ『君が母上身まかり玉ひぬ。かの女の最愛の兒にめぐみあれ』と。

夜となりてかれはまた前の星と、同じ行列を見たりしが、妹はまた其先導に問ふて『吾兄は來りしか』と云へば、『否、されど汝が母來れり』と答ふ。

母が其二人の兒に再會したりとて喜びの聲は、此時星の世界に響き渡れり。かれ手を伸べて叫びて曰ふ、『オヽ、吾母よ、吾妹よ、吾弟よ、吾は此處にあり、吾手をとれ』と、かれ等答へて『今しばし』と云ひしが、星はなほ依然として輝けり。

かれ今は早や其頭髮灰白なる老人となりて、心の悲みに氣も重く、只一人爐邊の椅子により、再びかの星を夢みて、涙の露に、眼を濕しぬ。

妹はまた前の如くに問ひしを、其先導答へて『未だし、されど、其最愛なる處女來れり』と云ふ。

かくて、かつて小兒たりし此人は、さる日死したるかれの處女の、それ等三人の内にありて、天上の物となれるを見たり、かれ云へる樣、『吾女の頭は吾妹の胸により、其手は吾母の首のまはりにすがれり、かくて吾はかの女との悲しき別を忍び能ふなり。嗟呼神は賞むべきかな』と。星は此時依然として輝けり。

斯の如くにして、かの小兒は老人となれり、かつて滑らかなりし其面貌も今はしわより、其歩武はおとろへてゆるく、其背は灣曲せり。ある世の事なりき、かれが臥床にありしときに、其兒等周圍に立ちたりしが、其時かれは、いにし古に彼が叫びたるが如くに、『吾かの星を見つ』と云ふ。

見等は互にさゝやきて云ふ、『かれは將に死せんとす』と。かれは云ふ、『吾は將に死せんとす。吾命は吾上衣をぬぎさるが如くに、次第に失せ去らんとす、吾はおさなごとなりてかの星の内に行かんとす。嗟呼吾天の父に謝す。吾を待てる吾が愛する者等の爲に、天

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の戸を開き玉へる事を謝す』と。かの星はなほ依然として輝き、其光は永久に彼が墳墓を照らさんとす。

家政

家庭の教育

躰育の必要

その昔腦を用ゆると少なくして、専ら筋肉をのみ用ひし封建時代には、躰育も智育も別ちなく、考ゆるものもなくして、しかも人は健康に長ぜしが、神系を勞すると甚だしく、腦を疲からしむると多くなるに随ひ、躰育は最も必要なる問題となれり。中にも學校は多く智育の發達に力を用ゆる所なれば、躰育につきては家庭の責任殊に大なり。

心意と身躰とは、影と日なたの如く、離るべからざるものにして、健全なる身躰ありて、初じめて健全なる心意を養成し得る事は、已に學者の屡々論ずる處なり、不愉快なる人、鬱とうしき人、殘酷なる人、邪悪なる人は、多く身躰の不健康より生ずとは、如何に恐ろしき話しならずや。床に伏して咳をなしつゝ、何も爲し得ざる人に、昔し話を爲さしむるに、彼は必ず嘆息して、私も躰の強よかりしときは、村中にて最も勇強なる壯ものと指びざゝれ、己れも勉強して何か一と事業爲さんと、寒夜にも腕をさすりつ勉强せしが、今は病氣となりて何を爲さん氣もなく、何を爲さんとも出來ずと、彼が昔しと今日と全く人の異りたるが如く、精神衰ろへ活氣なく、忍耐も、志想も、抵抗力もなきに至らしめしものは、たゞ病なり、不健康なり、健全なる身躰の、如何に必要なるかは之れを見ても明かならずや。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

智慧は百人に勝ぐれ、心は天の使の如く高尙に、何を爲さしむるも爲し得ざるとなく、實に美事と計り賞めし人にして、身躰弱わく、病絶へ間なき人なきにあらず、かゝる人を以て見る時は、不健康も健全なる心意を作り得るかの如く、思ふるれども、こは暗夜の星の如く、稀れにして、若かも例外中の例外なるのみならず、かゝる人に限ぎりて、末は殆ど定規にはめし如く、同一の最後に終らざるは殆どなし、かゝる人の友人は、「惜しき人を殺ろせりよ、未だ若かきものを」の一言は、必ず免れ能わざる吊辭也。學校等にありて、席末に列する人々を精細に注目すべし、彼等は多く靑き顏にして、頭を打ちつゝあるものか、ゲブ／＼と云ひて、胃病の廣告を爲すものか、咳きに苦しむものにして、不落第生を送る言葉は、大低惜むべし病身を以て業を卒へずの一言ならざるはなし、されば何れよりするも、躰育の大切なるは、非難に言葉なきを知るべし。

幼兒の躰育

長ぜるものは已れにて已が健康に注意するとなるべし、憐れなるは幼見なり、もし不幸にして鯛や鮃目の如く、子供を生むは余が責任なり、後は汝勝手に成長せよと云わん計りに捨て置きて顧みず、腹痛のために啼くにも、寒くして啼くにも、啼くが故に乳を飲しめて、口より出づるも、胃の破るゝも更らに心配せず、面白き所へ遊ばんがためには、半日の間、小守の脊に括くり付けて絶食せしめ、面倒を避けんがためには、無經驗にして、無分別なる乳母に、捨つるが如任かせて少しもかまわざる母に出遇ふ時は、五十年の生命を持ちて生れ來りし一人を、あわれ三歲に滿たずして、鬼籍に入らしむる氣の毒極まりたる結果を見るに至るべし。萬一からき生命を保ちて、成長なし得るにせよ、靑き顏の落第生にて、不幸なる一生を送るは、母が與へし賜なるを思はゞ、幼稚に對しての躰育は、別して

母の重任なるを知らん。たとへ又た、兒を愛し育ごくむと、他の母に勝ぐれ、己れを観みずして、小供の事計り思ふ人なりとも、所謂其道を知らずして、姑息の愛におぼれ、兒のためと思ひて爲す事、反て將來の不爲の源因となるが如きとあるは、めづらしき話しにあらず。其害と、無頓着なる母の與ゆる害とを比らぶるに、結果に至りては何の異る所なきは、母が躰育の道を知らざるの然らしむる所なり、故に小供を育つる母は己れ育兒の法を知らざるべからずと、先きに言ひたりしは之れなり。

小供の育て方に二た色あり

「太郎よそこに出ては、風を吹くといけないよ。そんなに飛んでは、倒ろぶとあぶないよ」と、愛に溢れたる老母が注意は、一寸の時間も、太郎の上をはなれず、あぶない。いけないの打ちけし言葉は、一年三百六十五日を通じて、朝より夜迄絶へざるものも、愛ある注意深かき教育と云ふに於て、一點の非難もなし。その老母が、嫁に云ふ所を聞くに『隣りの奥樣は小供にちつともおかまいなさらんよ、きのふの樣に寒むひ日に、良さんは原の眞中に出で紙鳶を飛ばしたり、輪を廻して居らつしやるのに、捨ておいでだよ、雨でも降ると、太皷の音で家が鳴り渡つて、どんばた〳〵と走り廻り、八釜しくても何ともおつしらないよ。怪我でもあつたらどうするんだろう」と、老母より聞けば隣の妻君はさも小供を捨てものになせし樣なれども、妻君が心中に耳を付けてその心得を聞く時は、彼は云へり。小供と云ふものは、人形の如く美わしく飾ざらしめて、其衣物を汚ごさゞらんが爲めに、泥遊びも禁じ、荒らき遊びも禁じ、家の掃除の行き届きたるを憚こらんがためには、小供の足音にも禁止を命じ、そら風を引く、そらあぶないと、人形使が人形を使ふ如く、少しも小供に自由を與へずして、即ち小供の發育を積極的に助す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

けずして、消極的に制さゆるのみにては、決して躰力も智力も發達するものにあらずと、之れも躰育に心掛げある妻君の教育法なり。

此の二たつの教育法に付き、何づれを撰らぶべきやと云ふに、勿論何れも一種の必要あり、餘り放任が過ぎて禍不注意より起るが如きとあらば、これゆゝしき大事なり。されども躰育と云ふものは、抑さゆるのみにては全きものにあらず、大に自由を與へ、自然に逆からわずして反て之を助け、鼓舞し、筋肉も強固となりて、少しのとに健康を害するとなき、強壯のものとなすと、又た必要中の必要なり。此の二つは鳥の両翼の如く、共に欠ぐべからざるものなるは、教育の任あるものゝ心がくべき處なり。

冬日と衣服食物のこと

追々寒天となるに當りては、衣服に付ての衛生之れ躰育を重ずるものゝ、最初に講ぜざるべからざる問題也。とかく寒中は、懶怠となり、衣たる衣物を脱ぐを厭ひ、且つは汗等の出でざるより、逐に洗濯を怠たりなどなすより、不潔なる垢付きたる衣物を、己れも着、小供にも着するとあり、併しながら寒中と雖も、人躰よりは、常に悪しきもの蒸發して、衣服を汚ですとは、他に異る事なければ注意は此の時こそ欠ぐべからざるなり。

今一は食物なり、食物は四時需用を異にして、時に淡白なるものを要するとあり、時に脂肪多きを要するとありて、其求めに應じて、之を給するにあらざれば、暑天に烈火を燃し、寒天に水を灑と同じ愚に落るとあり。而して冬は最も多く、その燃料を要する時なるを以て、只だに舌先きに温きものを撰ぶとなく、如何なるものが最も適するやを撰らびて、用ゆるは、善良なる器械方なりと云ふべし。

幼兒の食物は、種類を撰ぶと必要にして、度を定むる

ことの大切なるは、言を待たざれども、餘りに節することのみに心を用ひて、滋養ある變化ある食物を充分に與ゆることを忽せにすべからず。少さき小供は、大人と異なり、食事と食事の間餘りに長きに過ぎて、一時に腹を滿たす如き等は、平常少食になれたるに、其のひもじきを重ねて、母の居らざる時に多食するが如きことあらば、之れ大なる不養生なり。小供は割合に多く食して害なきものなるは之れ又た忘るべからず。

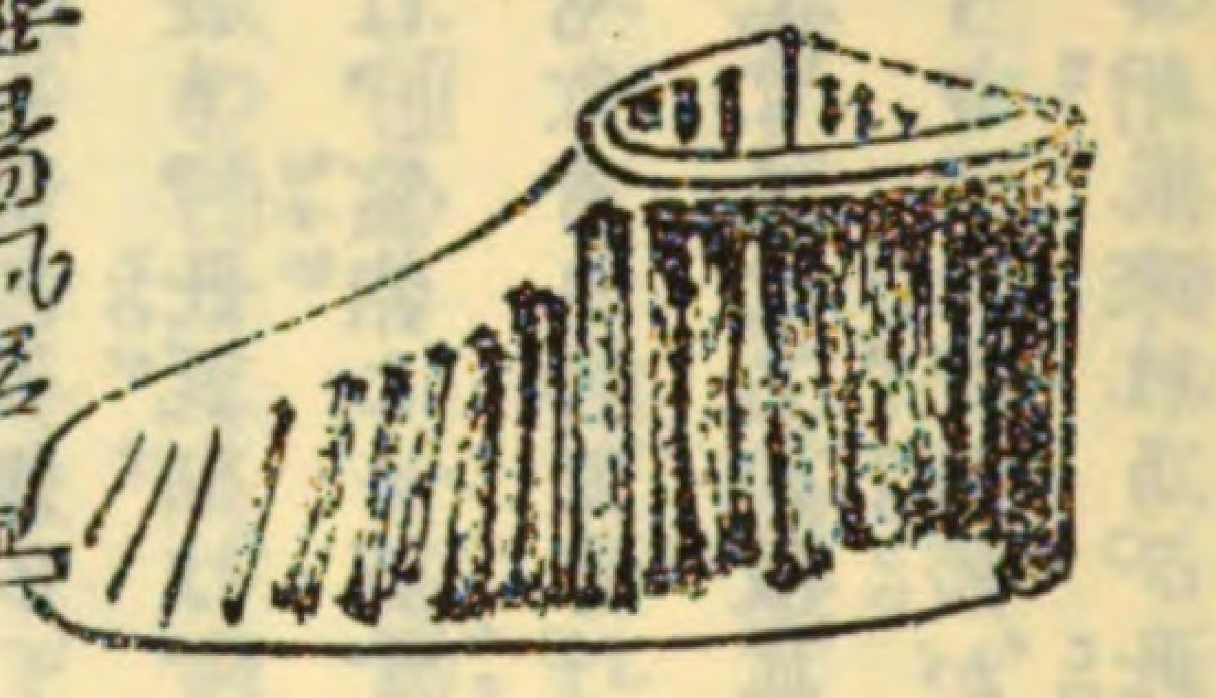
（未完）

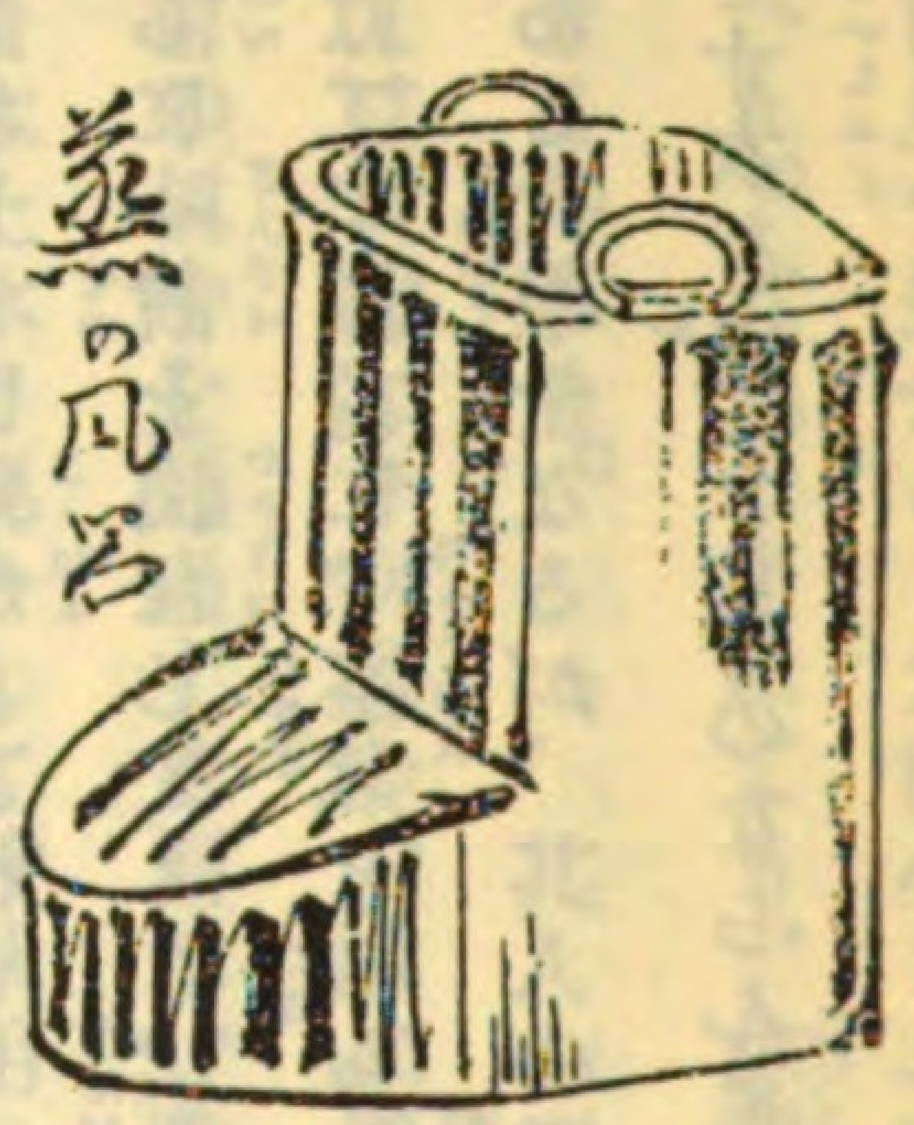
風呂と養生（承前）

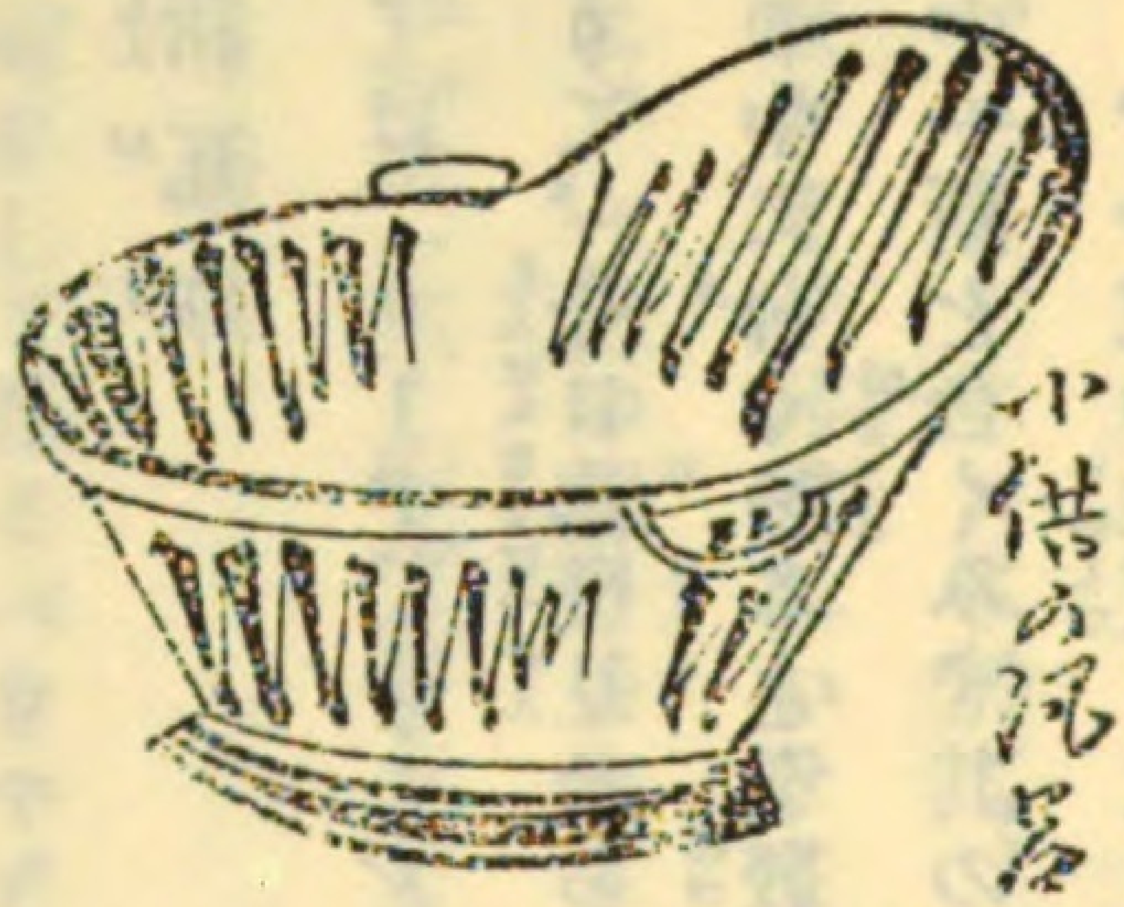
第四　蒸氣風呂

蒸氣風呂は殊とにリウマチを患ふもの腰の痛むもの皮膚病しもやけ等には功ありと雖も通常の人々にも神系の强よきもの若し〳〵は眠り得ざる習慣の付きし者等には最も神系を靜づめ眠を促ながすの功あり完全なるものを得んとならば價を出せば如何なるものも求め得べけれども最も簡便なるものは手製にて造り得べし。其作り方は狹まき一室を閉ち籠め柱より柱にけつとを引き張り其の外に火鉢を置き火鉢の上には成る丈け大なる鐵瓶か土瓶をかけて中の湯を能く沸騰せしめ鐵瓶の蓋は嚴びしくして氣は專らその口より出づるを計り口にはゴムの丸き管を通して其一端を先きに張りつめたるけつとの下に導ちびき患者は濕めりて不可なき衣物もしくはけつとを上よりかけて先きの釣りけつとの中に臥しをれば下より蒸氣は除々と來り其快云ふべからず大なる鐵瓶の無き時は釜にて一ぱい湯を沸立たせ之を桶に入れてけつとの下に置き持ち運びに手頃なる石を數個燒きて桶の湯の中に投じつゝ熱度を保ちそれにても不可なし。

第五　吹き出し風呂

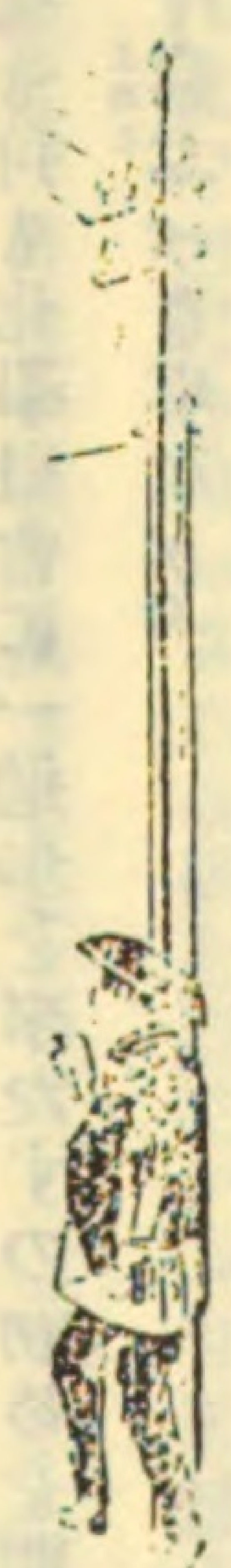

腰湯風呂


蒸の風呂


小供の風呂

此の風呂は多く固質なる秘結、白帶下若しくは他の慢性病に用ゆる風呂にして節の違かひしものも又た用ひて功ありと云ふ其仕掛けは二個の桶を据へ付け一は他の桶より數尺の高き所に置きその底には下の桶に連絡すべき管を通し湯を上なる桶に一ぱい入れば管を通して下の桶より吹き上るべしさて患者は椅子に腰かけてその患部を吹き上げの眞先に當る樣に坐し居らば湯は打つが如く撫づるが如く患部を摩擦して獨り按摩を爲すべし。

其他手足の冷ゆるものゝために芥風呂あり頭痛持のためには灌水法あり發汗を促ながすためには濕りたる布片の風呂あり腰湯藥湯等を一々記載せば二十餘種あれども平常の用に必要あらざるか故に之を省ぶくたゞ藥用風呂桶便利なる形あればその二三をこゝにかゝぐ。



學藝片々

發見せし新瓦斯

去る八月の事なりき英國にては、ロード、レーレン氏とラセムー大學教授とによりて、今日迄發見せられざりし、一種の瓦斯の空氣の中に含くめるを發見せられたり。此瓦斯は、空氣中一新を含くみ、其の稠密の度は、窒素より五十割多く、一定の性質もなく、自動力もなきものなり。未だ三合足らずの分量を以て試驗せしに止まるが故に、詳わしくは解からざれども、デユーワー大學教授が更らに一說を出だしてより、疑は益々增し來れり。此人は二年以前に、空氣を凍らしむることを發明して、名ある化學士なるが、其人の說に隨がへば、とは窒素が一寸衣を變へしものならんと。此瓦斯が窒素よりは濃き青色を呈せるとは明かなれども、窒素の變形か、將た新瓦斯かは未だ分明せずと雖も兎も角も化學社會に一進歩を來たすの初めを開きしは、喜ぶべき事なり。

空氣すら、初めは單純なる元素として信じられけるに、十八世紀の初年に至り、呼吸が人に害あるとよりして、空氣が人躰に入りて別物となり來るは不思議なりと云ふより、漸々その實物を發見するに至たれり。何に盡きらず初めは疑を以て開らかれ、終は光を以て逆へらる、此瓦斯の何物かを知り得るも遠からざるべし。

窒扶斯と砂こし

驚くべきは砂濾の功なり。シカゴとヒラデルヒヤとの中にて、砂濾を用ゆる所と、用ひざる所とにて、チブス患者の數を比較せしに、之を用ゆる所にては、一百人に付きて、死者六割七分七厘なるも、用ひざる所にては、八割二分六厘の多きを見たり。獨乙にてコレラ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

病の死者を對照せしに、砂濾を用ゆるアルトナにて、僅かに四十人を失なへる間に、ハンボルグにては、二百九十人の多數を失しなへり。其他の所にても、水濾の功あるは、實に著るしきものなり。

山間の人跡稀れなる所にては、悪しき病源の、水に混ずると少なしと雖も、都會の眞中を通過する河水、井戸水、若しくは水道等は、下水上水と混合して、飲用に絶ゆべきもの殆ど稀れなりと云ふも不可なき位也。毒物に二種あり、一は動物質の腐敗せるものにして、他は病氣の種子なり。過る頃、ローレンスに於て、チブスの種子を含みたる下水を取りて、砂濾にかけて試驗せしに、砂濾にかけざる前に、一萬の微分子ありしもの、砂濾を通りてよりは、僅かに二千の少數となれり。

砂濾の作り方

かく功用著しき砂濾は、如何にして作るべきやと云ふに、砂は成る丈け小さきものを良しとすれども、餘りに小さくしては、水の出で方悪しきが故に先づ八分四方の箱の中に八千粒を入るべき砂、精密に之を云へば一ミリメートル（ミリメートルは我三厘二毛餘に當る）の十分の二の一割より小さきものを度とし、深かさ一尺以上、成り得べくは四尺位の瓶に入れ、口に網を張りて砂の出づるを防せぎ、垢の滯まらざる内に時々砂を更ゆるを可とす。もし全く之を更ゆるを得ざれば、上の方一二寸の所のみにても、時々之を更ゆべし。毒物は上の方にて濾さるゝもの最も多ければなり。さて砂を更へたる時は、一二日若しくは四五日の間は、砂の中の毒物を去るために、屡々水を濺ぎては乾わかし、乾かしては濺ぐべし。又た平常と雖も、水を濾し絶間なきは害あれば、空氣中の酸素に、砂の中を通過して、窒素物を食ひ去らしむるの時を與たへざるべからず。完全なる事を求むれば、四尺の深かさある砂を以て、一日に濾すべき分量は、百五十石を甚りとす。

病氣を忌み且つ恐るゝ人々は、一日も此砂濾を欠くべからざるを知るべし。

輕卒なる婦人

やぎ生

醫者が病人の脈を觀て、これは大變です、御脈がたゞではありませんといひしに、病人は腹を抱へて笑ひつゝ、それは私の足ですシッかり觀て戴きたゐと云はれ、ホイ間違つた、道理で變だと思つたと、慌忙てゝ手の脈を觀たりとなんいふ話あれど、如何に輕卒なればとて、かゝる間違はまさかにあるまじ、されど婦人にして輕卒なる行ひを爲すときは、家庭亂雜となりて終には飛でもなき間違を生ずるに到るべし。

よくある事なれども、他家に往きて下駄を間違ひ歸りて氣付かず、沸騰せし湯をグッと呑で口中を傷り、釣瓶の竹にて負ひたる子供の目を衝き、肴を料理して手を怪我し、桶を洗ひてそげを刺し、藥の土瓶へ茶を投し、障子の開閉は何時も一寸位をあまし、負ひたる子供を窓の庇へ打付け、町へ用達に出つれば財布を紛はれ、臺所には飯粒を踏付け、ランプのホヤを破り、衣類の裁ち誤りは珍らしからず、雨天に歩行するときは襟の邊まで汚點を染め、傘小包は靜かに置きたるためしなし。

かゝる婦人の在る家庭に於ては、常に破壞のみにして整理といふべきことなし、これを矯めんとして罰金を徴するものあれども、罰金位では中々止むべきにあらず、その故は罰金〳〵といふに驚きて一時は謹むべきが二度三度と取立らるゝときはいよ〳〵慌忙て謹まんとして却て常よりは多く輕卒なるべし。

物事に輕卒なるは全く其者の性質なれば、これをして輕卒なるなからしめんとするには、彼れの擧動をして

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

鄭重を加へしむるにあり、それには罰金も効なし矧んや叱言に於てをや、矯正の策たゞ茶道あるのみ。

茶の湯は讀者の知る如く動作に禮法ありて輕卒粗暴の行爲を容さず、されば性急なる者といへども優々たらざるべからず輕卒ならんと欲して輕卒なる能はざるなり、故にこれが指導をうくるときは娛樂の中に禮儀作法を知り輕卒の行爲自ら止みて前に述べたる不躰裁を爲さゞるを得べし。

手藝案内

如何にして簡にして廉なる足袋を製し得べき

足袋は人間身體の附屬品中頗る要用なるものにして、之を用ゆれば冬季には着物一枚は儉約なりといふ、又夏季には塵埃等を避く、今や秋深くして裸脚は甚だ冷を覺ゆる時候となり、足袋の入用頻繁となりぬ。

東京の足袋屋にて購求すれば木綿足袋一足九文か十文にて白十三四錢より十七八錢紺は十六七錢より二十四錢迄是より以上絹足袋に至りては價格五十錢以上に登る、然れども絹足袋の如きものは、寒冷を防ぐと木綿に比し遙に劣等にして且つ實用に適せず、ほんの馬車に乘つて暮さるゝ華族方の贅澤品なり、されば中等以下は木綿にて澤山なり、下等社會の人にては木綿すら着くる能はず、寒中「ひゞ」「あかぎれ」に苦むにあらずや、上を見れば限りなし下を見るも限りなし、併しながら足袋は衣服とは違ひ、隨分木綿にて上中下に通用するものなれば、木綿製を何んぞ着用するが經濟的且つ衛生上にも適ふなり。

足袋屋より購求すれば世話なしと雖も、足袋は寒中數足を要し又家内に人多きに於て一々購求するは甚だ不經濟なり、今之を家庭にて手製したるものと比較すれ

ば一足につき七八錢の差異はあるなり、則ち下等に於て購求品十三四錢のものは手製にては五錢餘にて製し得られ、且つ裏地の如きものは必らずしも賣品のべら〳〵ものを用ゆるに及ばず、家庭にては布片箱を探さば手丈夫なるものを取り、足らざらば色紙を當てゝも差支なし、成るべく實用なるを製作すべし、次に其製作法を案內すべし。

最も布片を儉約して製作せんと欲せば、女物九文半にて表は少し上等なる木綿巾一尺を取り之を半巾に折りて外甲と內甲とたがひちがひに並べ都合兩足にて四葉を裁ち切り、其兩隅の餘れる分にて「小はぜ」をつくる所則ち「まち」を取る、表に合はする裏地は外見惡しきも丈夫なるものが、「もんぱ」の如き穿きて溫暖を保つものを撰ぶが宜し、普通ならば少し表より下等なる木綿、則ち下等なる河內木綿の類を撰び、木綿巾一尺の中に表同樣の裁方とす、（但し裁方の標準とするは足袋には必らず足袋形といふものあり小兒は小兒用、大人は大人用各々幾文と一定し、其雛形は裁縫に心得ある家々に備へあるか又は足袋屋にて買はゞ一錢五厘か二錢にて求め得らるべし、これは唯薄紙に其寸法のみ記しある迄なれば、自宅にて吳服紙の如き厚紙に切り取りて雛形と爲し置くを便利なりとす）底は三枚に重ねて一通り、木綿糸にて雜巾縫を施して其形を造るも宜しく、足袋屋に求めば三錢乃至四錢にて石底を求め得らる、併しながら自宅にて布片を節儉して製せんとならば、前述の河內木綿を九文半の割合には長七寸を兩足各三枚取りて之を縫合すれば木綿巾一尺一寸を要す（兩足各二枚は木綿巾七寸にて取り得れども、アト一枚宛は木綿巾四寸を繼ぎ合せて各一枚を取る、繼ぎ合せたる分は底の眞中に入るれば、少しも繼ぎたる[illegible]ず、されば他の古布片を用ゆるも差支なし、左すれば底の分は木綿巾七寸あれば足るなり）則ち都合木綿巾

三尺一寸の木綿を以て一對の足袋を製し得らるゝなり但し足袋に用ゆる布片は確りと糊をなし殊に底の如きは成るべく丈夫に糊張すべし。

扨其縫法は初め裏表を閉ぢ合せて外甲(廣き方)より縫ひ始め、底の縁につけ又小はぜをつける「まち」を縫ひ合せ、然る後内甲を底と外甲に縫ひつける、但し底につけるには其三分の二以上を縫ひつく、これを頭縫と稱して足袋の縫方の中最も六ヶしきものなり、足指の先と指の股とは能々念を入れずんば甚だ不格好となるべし、指の股には表より共布片を貼りつけ、三針四針縫とめ置くを要す、此頭縫と申すは一寸素人には出來にくきものにして足袋屋より内職に出すにも、頭縫を終りたる三分の一以下則ち底の半分以上の處より踵に至るまでの縫附を爲さしむ、然れども追々熟練に至れば頭縫も容易の業となるべし、踵までの縫附を終らば糸にて小はぜ留をつくり(二段に爲し置くを便宜とす)終らば是にて足袋も製しあがるなり、以上は九文半なれども十文なれば又足袋の雛形に應じて寸法を增し造ること前法と變らず。

右九文半を白木綿にて製さば三尺一寸此内表一尺は二錢五厘裏一尺は一錢五厘底地一尺一寸は一錢七厘、之に貝鉛の小はぜ一足分六個五厘と見積らば六錢二厘にて悉皆調達し得べし、此木綿にて出來したるものは賣品の十三四錢に優ること疑を容れず、紺ならば表一尺三錢乃至三錢五厘、裏二錢より二錢五厘迄の淺黄木綿を用ゆるを可とす、底地は前述白足袋の底と同樣なるを用ゐて宜し、但し裏地は「もんぱ」の如き若しくは「フランネル」の如き(綿「フランネル」ならば毛の方を出すべし)ものを用ゐるも自家にて製せば自由なり、是等を裏に用ゆる時は温暖を保つこと論を俟たず。

新染術(續)

桃色の染方――絹六百二十五匁に温湯七升の割合を以

て銅器に注き入れ置き、別器を以て其中に眞珠灰十五匁を入れ、少許の熱湯を注き入れ、其溶解するを待ちて、前の温湯中に混和せしめ、紅木綿（紅木綿の製法は家庭雜誌四十號紅汁の製法に詳なり）一枚を入れ浸す時は眞珠灰の灰氣により忽ち其紅分を液汁中に流出すべし、此時木綿を取り出し、直に別器を以て酒石酸二十二匁五分許を溶解し、右液汁中に此酒石酸水を少許宛注入し、其注入する毎に箸を以て迅速に攪ぜ然る後に染桶に水三斗を滿たし、以前の紅汁を加へ善く雑ぜ合せ、染めんと欲する物品を浸入せしめ置くこと凡二十分時にして取り出し、更に別器を以て温湯七升五合を滿たし、又別器に酒石酸二十二匁五分を溶解して此温湯中に注き入れ則ち此酒石酸湯に以前の染品を浸入せしめ置くこと五分時にして、之を取り出し水氣を絞り去り暖室にて乾す薄き糊を施し其仕上を爲すべし

但し染品浸染法の時間を長くし又は水の分量すれば則ち薔薇色若しくは深紅色をも染め得らるゝなり、又惣て紅染を乾かすには日光を忌み蔭干にすべし。

橙色の染方――之を染めんと欲せば「アンノッタ」汁液（此製法は「アンノッタ」百匁、眞珠灰二十二匁五分石鹼十五匁水五升を銅鍋に入れ、火を以て煖め、徐々に雑ぜ合せ、漸次に火を強くし、其沸騰するに至らしめて然して後其溶液を蓄ふなり、之をアンノッタ汁といふ）に染めんと欲する汁液を浸すことざつと一時間にして取り出し、淸水を以て洗ひ出すこと二回にして水氣を絞り去りて後能く乾かすべし、但し色の淺深は「アンノッタ」汁液の濃淡と浸染時間の長短によると知るべし。

琥珀汁の染方――之を染めんとならば始め前法により て橙色を染めなし然して後姜黄及倭祿脱各同量を湯を溶かし右染品を浸して黄色を含ませ、直くに取り出し、木綿に包み水氣を絞り去り能く乾かすを要す。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

黄色の染方——絹五百匁ごとに先づ水二升五合に明礬百匁を混同したる明礬水を造り、染むべき物品を浸染し置くこと一時間にして取り出し微温湯にていすぎ出し水氣を去り、更に「フスチック」二百匁を以て煎汁を製し右染品を入れ浸すこと三十分時間にして一應取り出し、此液汁中に以前の明礬水三合七勺五抄を注入し能く攪せ再び染品を入れ浸すこと十分時間にして取り出し、直ぐに水氣を絞り暖室にて乾すべし、但し「フスチック」に代ゆるに黄櫟皮を以てするも亦同じき色を得らるゝと知るべし、但し黄櫟皮とは黄櫟の木の皮にして之を煎じたるものを用ゐて物品を染む、從來日本に用ゐ來りし古式染法は大抵木の皮の煎汁を利用す、今玆に諸木の煎汁を造るの法を記せば、諸木の色分を得て染料と爲すに或は其粉末にしたるものあり、或は削片としたるものを用ゆ、此粉末より色分を得んと欲する時は、先づ笊に粗漏なる毛織を伸ばし、此中に木の粉末を入れ、此笊を桶に載せ其上部より熱湯を灑ぎ入れて桶中に滴流する湯に色分を存せざるに至らしむべし、其削片は銅鍋に水を滿て能く之を煎じ其汁の濃厚なるに至りて其汁を別器に移し、右削片を殘し置き、新に熱湯を滿て又煎沸して盡く其色分を煎じ出すべし蓋し木の性質によりて色分を含蓄すること尠なきもあり、斯の如きものは液汁稀薄なるを以て或は水量の半分まで煎じ詰めて使用に供すと知るべし。

美しき牡丹花(毛絲細工)

牡丹花を編むには萠黄の並糸を用ゆるを常とす、其編法は左の如し。

最初ずつこき結びの輪の中へ各一つ宛の無駄目をつくりて長打を編むことを爲し、それより糸を代えて極細の糸にて無駄編の中へ針にからみて二十回もあみ入るこれは則ち花瓣となるなり、次も一つ飛びて無駄目の中へ廿回針へかけて入る、箇様に五個所に作り、後又

糸を換へ極細十六番の鈎針にて前の二十回入れ置きした六個の目毎に長打を作りかへして葉の先にて止めるなり、斯の如き葉を造ること此外に三葉都合四葉にて牡丹花の四隅に附すれば花葉具備する牡丹を製し得らるゝなり。

（※上段の続き）

糸の先を「ミシン」編にて編む時は、自ら花の形を編出だすに至るべし、後ち縁編をつくる、此の編みたるものは最初の一廻となるなり、花の中廻は最初の花瓣と花瓣との間へ三個の鎖をあみ之を五個所につくる、其鎖編の中へ前廻のあみ方の如く、針にかけて十五回あみ入れを爲し、之も亦五個所に作るなり。

其後糸をかへして「ミシン」編にて縁をつくり、それより黄にても或は白にても或は赤糸の類にても其人の好に任せて今迄製作したるものゝ眞中に蕊を作るなり、之をつくるには廿度位二本の指に糸を卷き、其眞中を木綿糸にて縛りつけ、其の頭を剪りて眞中につけるなり。

これより葉をつくりかゝる、則ち萠黄の糸にて葉を作る、葉の作りかたは普通の毛絲にて九つの鎖編を爲し夫より長打を九つの中に六つ作り其後糸をかへして又

＊　＊　＊　＊　＊

愛讀者諸卿より職業案内及手藝案内の事書面を以て詳細御尋問相成候處大抵は御回答申上候へ共事頗る複雜に渉り候ものにて本社に於て必要と認定致候事は必らず本紙上にて詳細に揭載の上諸卿の閱讀を煩はしたく夫故書面の回答は致さゞる事も有之左樣御承知置被下度候也

社交一斑

流行の栞

洋服　　春夢

洋服の流行は一般より言へば先づ左り前なり、殊に婦人用洋服に至りて

は大禮式大宴會の外は宮殿と稱して可なり、一時洋風旺盛なりし頃は、誰にても洋服々々と稱したりしが、今や男子用と雖も諸官省の勤人の外は餘り見受申さず、又洋服先生と言へば世人の尊敬を受け、俗にも洋服三割髭五割などゝ稱し、其の尊敬を受けるだけそれだけ一寸買物をするにも割惡るし、これは勿論商人等が輕蔑すると謂ふにはあらず、洋服を着たる先生は富貴の人と思ひ做されたればなり、其證據には洋服を着たる先生が道を尋ぬる時は、立番の巡査と雖も隨分丁寧の御挨拶あり、取次の下女と雖も日本服と西洋服の來客には何となく待遇の差別ありしにあらずや、然るに今や洋服の價格と洋服を着る先生の價格も大低相場が知れ切りたれば、世人は先年程洋服を崇拜せず、且つ洋服は日本人に無格好にして又日本の座敷には不適當にして且日本人には着心惡しく而も野暮の風あれば洋服の流行は今日に於ては頗る氣焔を收めたり、婦人服は禮式用の外は都下にて有名なる洋服仕立屋へ注文稀なりと、之を六七年前髷娼婦までが洋服の流行に感染したる時期に比し實に非常の變化を來したり。

然れども今日洋服の不流行となりしは如何なる現象より來るか、取りも直さず社會が貴族的即ち贅澤的となりし證なり、洋服は實に平民的なり、實用的なり、其織物の上よりいふも仕立の上より言ふも、其體裁の上より言ふも實用的なり、實用的なるが故に意氣とか粋とか申す趣なし、其價格より言ふも日本服に比して廉なり、日本服は三枚重裏地、羽織、帶、襦袢等を合せて仕立つるに百圓以上にあらずんば目立ざれども、西洋服にては十五圓二十圓より間に合ひ且つ洋服の材料なる織物は大低毛織なれば大低高の知れたるものなり、而して其の保持の點より言ふも同じく使用して洋服が五年着用せらるゝ所は日本服(絹)は三年の間使用せらるゝ割合なり、これ即ち貴族的平民的の別るゝ所以にして、且つ洋服は一領を日々着用するも少くとも三個年は持續し得れども、若し其洋服と同價なるペラ〳〵の絹布を纒ひて歩行して日勤するが如きことあらば半月を經ずして裾裏を擦り破ぶること疑なかるべし、且つ洋服は頭巾外套を着用し居るに於ては、雨天降雪の中にても恐るゝ景色なく傘なども携帶するを要せずと雖も、日本服にては若し傘なきに於ては衣服の損害夥しく假令傘を持參すると雖も吹雪、横雨たへがたきにあらずや、是等の點より見れば實に西洋服は平民的なり、實用的なり、或は場合に於ては治外法權(譬へは洋服はあぐらを許さるゝが如き)我軍人の服裝を見よ、羅紗の外套頭巾悠然と雨中を大歩するに引替ゐ、支那兵の如きは提灯を持ち雨傘を翳す風采の恐さよ、日本軍が連戰連勝支那兵が連戰連敗服裝の上より見るも誠に偶然にあらざるな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

知るなり。

故に曰く實用的衣服を撰ばんとならば西洋服に如くものなし、殊に活潑なる働きを爲すに於ては益々西洋服の必要を感す、苟も人々勤勞する間に意氣さか粹さかを論する暇あらんや、花車風流は老退せる人の閑事業なり、人生須く實用的の生活と實用的の働きを爲すべし。

前號及前々號の本紙上に於て日本服の案内は記し置きたれども未だ洋服の事に及ばざりき、次に聊か洋服の流行を記すべし。

本年洋服の流行風を概して言へば矢張今春と差したる異動なく、唯襟明き即ち胸部の明きの廣くして、「ヅボン」の大且つ廣きを可なりとす、之を一々區分して記せば、「フロック、コート」は黒綾羅紗の三揃を可なりとし、(價格十八九圓より)「モーニング、コート」は上二枚を黒綾羅紗にして「ヅボン」は竪縞を好む、色は淡茶、鼠色を多く撰むが如し(價格十四五圓より)脊廣は羅紗地淡鼠或は淡茶の格子縞三枚揃を第一等とし、上二枚を紺又は黒羅紗とし、「ヅボン」を竪縞に撰めば是亦流行の旨に適ふと知るべし、但し上着の前は丸形よりも角形多く見受らる、(價格はスコッチ地十圓より上等は十五六圓にて仕立得べしと)

外套

外套の用に五種あり曰く美觀を裝ふこと曰く温暖を保つこと、曰く雨雪を凌ぐること、曰く人目を避くること、曰く衣服のボロを隱すこと等なり、又外套には二種あり曰く西洋服用曰く日本服用是れなり、西洋服用外套とは取りも直さず「オーヴァー、コート」にして日本服用外套とは鳶形なり、「オーヴァー、コート」は單に西洋服にのみ行はれども、鳶形に至りては和洋兼用せられ得るものなれば、此形の流行日一日年一年に流行の域に進めり、其流行形は「オーヴァー、コート」は相も變らず丈の短き方にて上衣と殆ど同尺位のものを着用するものを弗々見受らる、地は無地羅紗にして色は昨年の通り淡茶、淡鼠第一等の位地を占むるが如し、其價格は普通十二三圓より二十圓内外に至るといふ。

和服用外套則ち鳶形は昨年も報道し置きたるが如く、脊面に襞をつけて歩行に自由ならしむ、これは隨分工夫を見せたるものなれば流行も怪しむに足らず、地は縞羅紗又は茶、鼠、無地の羅紗にて製作したるもの上等品にして、縞羅紗又は「スコッチ」製は普通品と知るべし、裏は普通物には毛繻子上等品は甲斐絹、最上等に至りては緞子の裏を用ふるものあり、右を洋服裁縫師に依賴すれば下等七八圓より最上等廿四五圓になるといふ、襟に臘虎の毛皮を用ゆるは上等なれども、今年は毛皮甚だ騰貴して安價に手に入らずと聞けり。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

七歳祝の花簪

七歳祝の衣服は前號に案内し置きたるが、可憐の娘兒の頭上には何を飾らるべきか。



一昧より言へば禮式なれば鼈甲製花簪(若しくば贋鼈甲)に限れども今年は日清戰爭事件につき我日本軍が連戰連勝を重ねたるより花簪にも種々様々なる流行品を出したれども孰も品格に乏しき安物にて迚も七歳祝の禮式用さするに足らず、此の頃尾張町松田白牡丹本店に工夫して賣出したるは、圖に示したる如き金銀「モール」製の花簪なり、一は「祝大勝」と書したる末廣に銚子(盞の上に人造眞珠を置く)、盃を添へて日本大勝を祝し、一は將校の軍帽に九重の御紋をかたちつくれる菊花を添へ是も日本軍の大勝利を紀念するものなりと價は兩個共二十五六錢なりき。



次に示すものは「ほまれがけ」と稱するものにして、他店にて工夫賣出し



ほまれかけ

に係るものなり、これは十五以下の銀杏返しに使用せらる流行品なり、根懸の中央に陸海軍人の寫眞譬へば大島少將、松崎大尉、野津中將、喇叭卒、樺山中將、大鳥公使等の縮寫々眞をはめあり、品も餘り無品格にあらざれども價は五錢内外なる由は少女の用には或は妙ならん。

日用品物價

◎白米(一圓に付) 一等白米六升五合●二等白米六升八合●三等白米七升一合●四等白米七升五合●五等白米八升〇合

◎雜穀 ●本貫大麥二斗三升五合●脇塲大麥二斗三升五合●肥後上小麥一斗九升五合●同麥安二斗〇●船橋小麥一斗九升五合●常州小麥二斗〇二合●下總小麥二斗〇●千葉小麥一斗九升七合●札入竹林麥一斗四升〇並一斗五升〇●上割麥一斗四升五合並一斗六升五合●佐野搗栗一斗二升二合●稗五斗五升

◎鹽 ●赤穗三俵六分●大鹽井に八家三俵七分●本齋五俵一分●新齋五俵五分

◎油粕類 ●上本貫種粕一枚四分五厘●本貫胡麻粕一枚六分●荏粕二枚〇●菜種一斗五升五合見當

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

雜録

兵學校の生徒

無一生

佛王路易十五世の治世に當りて一少年の某兵學校の官費生となりて入校したるがありけるが其口腹の慾を節するや老ひたる人にも少き人にも稀れに見るところにして殊にコノ少年の如き年齢に在りては實に比類稀れにしてコノ少年は食物にはソップと硬きパンの外何物をも用ひず飲物には水の外何物をも用ひざりしがコノ異樣なることは遂に副校長の知るところとなりて副校長は少年を詰り責めたる樣「御身はソップと硬きパンと水の外は一切他の飲食物を用ひさるとのことなるが丌は當校にて御身に給する飲食物が御身の口腹に適はざるためなるか」「否々決して去る仔細にては候はず本校にて給せらるゝ飲食物は余の口腹に適するものゝ如く見へ候ふ然れども余は丌を用ゆるに忍びさるなり」と云へることの外他の答辨を得さりしにぞ副校長はありし次第を校長に物語りければ校長は先づ少年を呼寄せて言葉靜かに總して異樣なることを避け而して學校の風儀に從ふことの如何に必要なるかを說諭したる後少年が校長の說諭に對して自個の異樣なる行爲の趣意を毫も明かさゞるにぞ校長はイデヤ其儀ならば父母の家に送還さんと少年を恐嚇するの已を得さるに立至れり當下少年は「ア、校長閣下には余の行爲の理由を知り給はんとするや今は是非なし其理由を申上ぐべし抑も余の父母兄弟は赤貧洗ふが如く去れば彼等は黑パンを食し水を飲みて露命を繫ぐの外他に何等の飲食物を有せす之に反して余は當校にありて結搆なる飲食物を目撃し而して余の家族の難澁せ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るヿを思ひ遣りては胸塞りて食するヿ能はさるなり」ヿ斯く言ひ畢りて少年は家族等のヿの胸中に往來して憂悶遣る方なく搗てゝ加へる自個が家族の窮苦を明かさゝるを得さる餘儀なき仕儀に立至れるを以て且つ慚ち且つ悲しみて泪に咽びけるが校長は坐ろに哀はれを催し少年を吾胸の邊へ抱寄せ而して少年を慰めんと務めけり「時に御身の父親は舊士官にてあるとのヿなるが毫も年金を享けて居られぬのであるか」「然り校長閣下よ父は二年以前より年金を得んヿを其筋に請願致し居れども未だ其筋より何たる御沙汰も候らはず」「愛すべき少年よ余は明日より陸軍大臣に面會し八日以内に御身の父親が年金を得るの運ひに至るべきヿを御身に約すべし去れば今は快く他生徒同樣に飲食されよ而して王の御名を以て余が御身に與へんとするコノ三路易を御身の小使錢として受納めよ將又御身の父親に對しては余は彼の年金の第一期の三ヶ月分を前金にて支出すべし」少年は滿面に笑を湛え「併し校長閣下よ如何にして其年金を余が父の許に送り給はるべきや」「其は毫も御身の心配を要せざるなり吾等は其方法を求め得べし」「ア、校長閣下よ御身送達の便を有し給はゞ唯今御身より賜はりしコノ三路易をも併せて父の許に送り給へ余は當方にて何不足するヿもあらざればコノ三路易も余には不用なり而してコノ三路易にして父の手に渡らば余の兄弟等のために如何ばかり有用なるヿに使用せらるべきに」

自然のつくろはぬこそ

（口給の綸解き）

頼俊朝臣あるとき雨やどりして東寺の門にたち寄りたるに、傍らに足のぬけしたるもの手のまがりたるかたわの集ひゐたるを、初めの程は興あるものとして見

てありしが、遂にはいまわしくなりて、かたわならぬ人こそ勝れるを覺へたる。家に歸りて、盆栽鉢植などの手入したる植木はこれ植物のかたわなるものにして、自然のつくろはぬこそ却て興ありとて、盡くその鉢植を捨てたりとなむ。(徒然艸)

時事一斑

天長節

陛下は親征して廣島に於ける明治の木の丸殿に勃興日本の第一天長節を祝させ給へり。殊に記憶すべき天長節は明治廿七年十一月第三日の天長節にあらずや。

日本兵は如何に强き乎

國民新聞記す。現時に於ける我が陸兵都ての兵種を通じて四千二百廿六人につき調査したる躰力の度下の如し、殊に訓練一年にして已に如何に好き成績を收め得べきやを見よ

	身長 尺	胸圍 尺	肺活量 立方仙迷	呼吸縮張差 寸	躰量 貫	握力 瓩
入營の時	五、四四	二、七六	三六七一、〇〇	二、二九	一五、五七	三六、八五
一年後	五、四五	二、八〇	三六九六、三八	二、四九	一六、〇八	四〇、六四
增加	〇、〇一	〇、〇四	二五、三八	〇、二〇	〇、五一	三、七九

又兵種別に一年の訓練を經たるものを比較すれば

兵種	身長	胸圍	肺活量	呼吸縮張差	躰量	握力
歩兵	五、三四	二、八〇	三五三一、二〇	二、四四	一五、六三	四二、七六
騎兵	五、三五	二、七七	三五七八、〇九	二、二四	一五、三五	四一、〇一
砲兵	五、五三	二、八二	四〇二一、〇〇	二、七二	一六、四九	三五、一三
野戰砲兵	五、五五	二、八六	三六二三、六四	二、五一	一七、一七	四四、〇一
要塞砲兵	五、五五	二、七六	三九二二、六三	二、六五	一六、一三	三九、〇四
工兵	五、五一	二、八六	三七二〇、九二	二、四四	一六、五五	四二、四五
輜重兵	五、三五	二、七六	三四七八、二〇	二、四三	一五、二七	四〇、〇六

則ち身長に於ては野戰砲兵要塞砲兵第一にして平均五尺五寸五分あり胸圍の廣さに於ては野戰要塞の砲兵及び工兵第一にして二尺八寸六分あり肺活量に於ては砲兵第一にして四千二十一立方仙迷あり呼吸縮張の深さに於ては砲兵幷に要塞砲兵第一にして二寸七分二厘及び二寸六分五厘あり躰量に於ては野戰砲兵第一にして十七貫百七十目あり握力に於ても亦野戰砲兵第一に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

して四十四幾瓦の一あり誰か我兵を小なりと謂ふや。

日本人の日本人たる所以

新約克ヘラルド新聞特派通信者ゲルウヰル氏平壌の戰を見て報じて曰く、

余は司令長官野津中將と談じつゝありしに、四名の淸人を本部の殿堂に連れ來る者あり。彼の憐れむ可き漢子等は、嚇死せむばかりにて、忽ち跪き落ちぬ。此四名は戰爭中さる日本士官等を載せて河を渡る可き旨を命せられ命の如く爲したる船守にて、今や其報酬として潤澤なる金を受け、且淸國に歸り得可き旨を告げられたり。彼等が道に哨兵若くは軍艦に捕はるゝことなからんが爲めに、彼等は通行劵を與へられぬ。彼等は其眞なるを信じ得ざりき。彼等は大に恐れて面々相見、久しく敢て歩み去らざりき。船守等の後に一名の淸國婦人立てり。此無人の市中に於て、朝鮮人も、支那人も、婦人とては唯此婦人一名のみなりき。彼女は頗る美麗にして面白く、また淑女らしく、要するに極めて文明的の相貌を有せり。彼女は少しも恐れず、自由に談話せり。余は前夕彼女がさる日本兵士等の爲めに食物を調理するを見、如何にして淸國婦人が此處にあるかを怪しめり。今聞く所によれば、彼女は平壌の淸國電信技手の妻なり。彼女は更らに妨害せらるゝこともなく、何處に往來するも自由にて、また食物も與へられたり。而して一萬六千の兵士及人夫の占領せる此地に於て唯一の婦人しかも敵の妻たる婦人の、斯く尊敬、鄭重に待たるゝを思へば、更に亦驚嘆に堪へたるものあるなり。彼女は俘虜の中なる其良人の放免を願はん爲めに來りしなり。斯の如き事實にして若し日本の好所を證せず日本兵士の見事なる訓練行狀を表せずば、余は言ふ可き所を知らざるなり。余は吾見たる渾ての事につきて、如何に吾嘆美を表す可きやを

知ず。其は殆んど言葉に述べ難き程に見事なるなり。此くの如きは則ち日本人の日本人たる所以にあらずや

自　信、本　領

久しく邦人を輕侮して何事をかなさんといひたりし歐米人も、平壤黄海の戰勝後は賞揚して遑あらざるが如し。昨は九地の下に貶し、今は九天の上に揚ぐ。毀譽從來毛よりも輕し。日本人は須らく日本人の自信あるべし。日本人は須らく日本人の本領あるべし。

朝　鮮　傳　道

朝鮮國民の墮落を救はんが爲に、本多庸一松村介石巖本善治其他の諸氏は大日本基督敎傳道會を組織して福音を入道に宣べんとす。而して佛敎徒は既に已に之が布敎に從はんとしつゝあり。

朝鮮人民は未開人民にあらずして、墮落人民なり。之を救ふはそれ唯宗敎に在らん乎。勉めよや人々。

日　光　照　る　所　皆　可

去る十七日郵船會社の滊船仙臺丸は四百九十八人（男子）の出稼人を載せて西印度なる佛領グワダループに向ひ神戸を解纜したりと云ふ。内醫師一人、管督者三人。砂糖培養の爲にして、布哇出稼の好果を得たるに由る。邦人の西印度に出稼する實にこれを始となす。「去れ、去れ、到る所に去れ。西印度可なり。南亞米利加可なり。日光照る所皆可なり。

兩　羽　地　大　に　震　ふ

二十二日兩羽地大に震ふ。酒田町鶴岡町を始め被害甚だし。二十五日正午までの調査に、死亡者三百八十四人、潰家千二百二十戸、半潰家五百十四戸、燒失千三百四十八戸。

去れば濃尾の震災にも比すべき程の大震災なり。然るに不幸にして偶日清交戰の日に當るを以て未だ大に人を顧みしむるに至らず。世の慈善家たる者此の如き日に於て爲あらずんば復何れの日にか爲すあるべき。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭叢書第五卷
小兒養育
定價十錢
郵稅二錢

本書は專ら小兒の身體を養育する方法を例の平易明白の文章を以て最も親切丁寧に說明したるものなり則ち(一)現今の小兒養育(二)懷妊中の心得(三)母の乳(四)乳母の乳(五)牛の乳(六)小兒の食物(七)入浴の心得(八)小兒の身體及看護(九)小兒の衣服及寢具(十)小兒の衛生等なり

再版
家庭叢書第四卷
家庭教育
定價十錢
郵稅二錢

本書に對し各新聞の批評は實に如左也

◎新家庭の建設に熱心なる民友社の家庭叢書は既に第四卷に及べり本書は家庭の教育に關して父母の位置、職務、言語の開誘、書籍の選擇等其あらゆる事項に付或は理論より說き或は實際より徵して新家庭を造らんとを誘導奬勵せり文章は例の平易明白(讀賣)◎同じ叢書の第四卷、前卷は專ら玩具の撰擇に關して縷說し本卷は廣く兒童に對する父母の心得を說明せり(一)家庭教育の本旨、(二)父母の職分、(三)家庭教育の陷り易き弊などよりはじめて小兒を薰陶する種々の方法を示したる、文章例の平易にして俗耳に入り易し、二書共に親たる人の一讀を要す(早稻田文學)◎家庭叢書の第四卷として發行せられたり家門に麒麟兒を出さんとするもの此一書を讀まば大に得る所あるべし(都)◎此編には家庭教育を論じ父母家族の言行一家の風儀兒童の薰陶に大影響あるとを詳述せり文字を解する細君方は一讀すべきなり(中央)◎家庭教育は家庭叢書第四卷として民友社より發兌せり、議論着實にして、實地上(プラクチカル)の智惠(ウイスドム)に富むこと西國立志編の如し、好書と云ふべし、(經濟雜誌)

三版
家庭叢書第一卷
家庭の和樂
定價十錢
郵稅二錢

再版
家庭叢書第二卷
夏の家庭
定價十錢
郵稅二錢

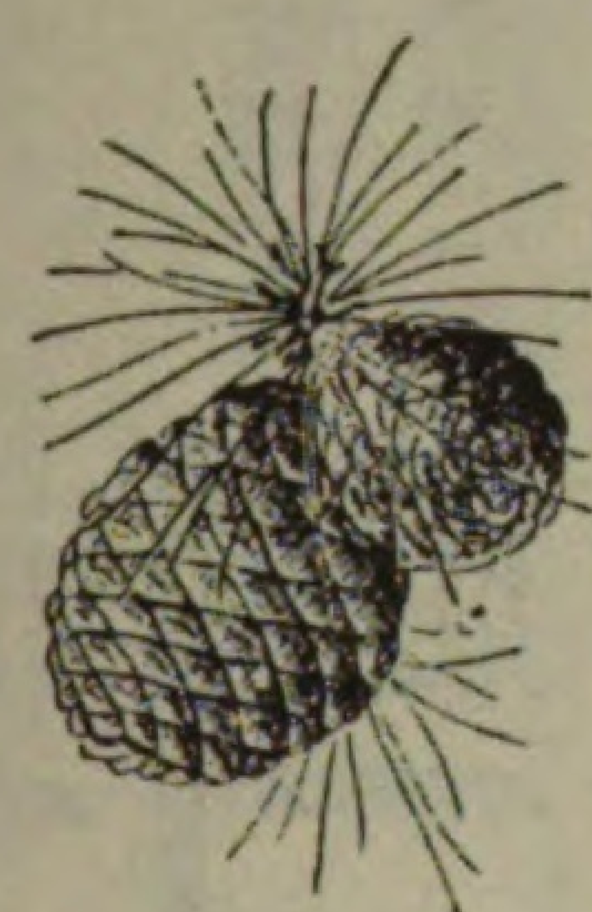
再版
家庭叢書第三卷
玩具と遊戲
定價十錢
郵稅二錢

家庭叢書第六卷
家庭衛生
來ル十七日發兌
定價十錢
郵稅二錢

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治廿五年九月十四日逓信省認可



東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA